

エバアツ



2016 秋季号 118

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

2016年 秋季号 118

巻頭言	副会長	佐藤清一	・・・	1
観察会・研修会報告				
森の新緑観察会			・・・	2
北広島レクの森観察会	札幌市	開米房代	・・・	3～4
オオハンゴンソウ防除			・・・	5
藻岩山登山	札幌市	菊地恵子	・・・	6～7
鶴川研修会	登別市	内田尚志	・・・	8～10
夏の森観察会			・・・	11
胆振地区観察会（中止）				
ボランティア・レンジャー育成研修会		新谷良一	・・・	12～15
投稿・連載				
ノスタルジー（ふる里の自然）	千歳市	西川惟和	・・・	16～21
近づけば、見えなかったものが、見えて来る	伊達市	木村益己	・・・	22～23
キノコ採り散歩	札幌市	松原健一	・・・	24～25
白山へ行って	江別市	大表順子	・・・	26～27
雪虫とカメムシ	苫小牧市	谷口勇五郎	・・・	28
自然観察NOW	No. 12	札幌市	春日順雄	・・・29～30
	No. 13	札幌市	春日順雄	・・・31～32
	No. 14	札幌市	宮津京子	・・・33～34
観察会下見時の話題提供				
6月「ゲンノショウコって 漢方薬？」	江別市	藤田 潔	・・・	35～37
8月「野鳥をガイドする～私のガイドの試み」	札幌市	道場 優	・・・	38～43
事務局便り			・・・	44
編集後記				

♪ 表紙 ♪

（ 絵と文 ） グロース千鶴子

滝から水玉浴びて今年の秋は紅の葉をどんなふう
に粧うのでしょうか？楽しみにしています。

佐藤 清一

分子生物学者の福岡伸一さんが「朝日新聞」に「動的平衡」というテーマで毎週、約700字程度のコラムを載せていて、なかなか好評なようである。生物学に疎い私も引き付けられておもしろく読んでいる。そこに掲載されたシラーの「詩」は、<横浜のみなどみらい駅>に下車して、長いエスカレーターを登って行った所の大きな壁に、アメリカの現代アート作家の作品があり、そこに日本語とドイツ語で刻まれているそうである。そこで、まずその碑文を記してみる。

樹木は、この溢（あふ）れんばかりの過剰を 使うことも、享受することもなく自然に還（かえ）す。動物はこの溢れる養分を 自由で 嬉々（きき）とした自らの運動に作用する。

福岡さんのすぐれた解説を参考にしながら、論じてみたい。樹木をはじめ植物たちは太陽のエネルギーを過剰ともいえるほど固定化し葉を、そして種子をつくり育て、惜しみなく虫や鳥たちに与え、それらが水を浄化し土壌を豊かなものにしていく。こうして大きな生命の循環をしている。植物たちが利己的に振舞って、自分たちの生命をつなぐために必要で最小限の光合成しか行わなかったら、今日のような生物の多様性はなかったであろう、と思われる。自然の豊饒さとそのもっている意味合いを捉えてみるのがとても大切であろう。

動物たちに限ってみれば、自分たちの種の保存のためにたえず奪いあい、争い、縄張りづくりをしている。利己的な遺伝子に規定されてそうした面をもっている。動物たちは植物たちが作り出した豊かさにありつこうとして争っているようにも見えて来る。でも受粉を助けたり、種子を運んだりして大きな役割を担っている。

人間もそうした利己的ともいえる遺伝をもっているが、それらを超えて物を譲りあったり、分け与えたり、協調しあったりしてきた。長い歴史の経験のなかで学びとった貴重なものであろう。

私たちは詩人シラーというとベートーヴェンの「第九交響曲」で、最後に合唱される歌・「歓喜の歌」の作詞者として有名である。ベートーヴェンはこの「詩」を大切に温めていて、最後の大作のなかで用いて高揚感をつくりだしている。シラーは若いときの高い理想に燃えたこの詩を、後年やや反省もしていた。彼のこの詩「歓喜の歌」はこうしてよく知られることになったが、自然の豊かな本質にせまった「詩」は、残念ながらほとんど語られてこなかった。

植物たちが作り出す自然の豊饒さ、命をつないでいる大きな役割、それにどうかかわって生きていくのか、とても今日的な重要なテーマである。私たちはその豊かさに甘えてもいる。年間約13億トンもの食品が食べられることもなく棄てられている。その一方で、アフリカをはじめとして9人に1人が飢餓で苦しんで死んでいっている。こうした非対称的ともいえる悲しい現実がある。そこには利潤の追求という経済社会システムが貧富の格差社会をつくりだし再生産している。このシステムはたえず不平等な分配関係をつくり拡大し、驚くべきほどの貧富の差をつくりつけ続けている。

このような経済システムは人間のもっている利己的遺伝子が大きな顔をし、騒いでいるようでもある。そうした利己的のものを乗り越えて、他者とも協力しあって生きる利他的なものになってきたはずであるが、それが歴史の進歩でもあろう。

私たちはシラーの一片の詩は、自然の豊饒さが生命の循環をささえ、そこでは利己的なものを超え利他的なものとなって動的平衡をつくりだしていることをも教えている。私たちは自然の子供であり、そのもとで営む経済社会、そこにある生産と消費とのアンバランスな関係、豊かさと貧困とった分配上の格差をたえず改革していくことがアクチュアルな課題にもなっている、と思う。

共催「森の新緑観察会」報告

6月4日(土) 観察会下見：話題提供 藤田 深さん「ゲンノショウコって・漢方薬？」

6月5日(日) 観察会：10:00~12:30

エゾユズリハコース～志文別線～大沢コース(約3km)

参加者51名 ボラレン13名

観察できたもの

- シダ類** ミヤマベニシダ、オオメシダ、イワガネゼンマイ、オシダ、エゾメシダ、コウヤワラビ、ヒメシダ、サカゲイノデ、ホソバナライシダ、ホソバシケシダ、ミゾシダ、ヤマドリゼンマイ、ジュウモンジシダ、ナツノハナワラビ、クジャクシダ、ゼンマイ、イヌガンソク、
- スゲ類** ミヤマジュズスゲ、グレーンスゲ、アズマナルコ、ゴウソ、ミノボロスゲ、
- 木本開花** ミヤマガマズミ、シウリザクラ、ホオノキ、
- 木本蕾** ツタウルシ、ツルアジサイ、
- 木本説明** ミズキ、ヌルデ、ニガキ、ケヤマハンノキ、エゾユズリハ、オオモミジ、アカイタヤ、イタヤカエデ、ハウチワカエデ、オニグルミ、クリ、ハリギリ、ミズナラ、トドマツ、
- 木本果実** ハイイヌガヤ、ミヤマザクラ
- 草本開花** サイハイラン、コケイラン、バイケイソウ、チシマアザミ、ヒメヘビイチゴ、オオハナウド、カラフトダイコンソウ、ヘラオオバコ、セイヨウタンポポ、フタリシズカ、マムシグサ、コンロンソウ、クルマバソウ、オククルマムグラ、クルマバツクバネソウ、ツクバネソウ、オオアマドコロ、ホウチャクソウ、ワニグチソウ、ヤマシヤクヤク、マイヅルソウ、
- 草本無開花** イヌゴマ、アマチャヅル、キンミズヒキ、ミズヒキ、ヤマブキショウマ、トリアシショウマ、サラシナショウマ、オオバコ、ミミコウモリ、
- 昆虫など** エゾハルゼミ、エゾマイマイ、サッポロマイマイ、オカモノアラガイ、ハムシの仲間
- 鳥類** ヤマゲラ、ヤブサメ、ウグイス、ツツドリ、アオバト、センダイムシクイ、

天候に恵まれ、エゾハルゼミの蝉しぐれの中の観察会となりました。

担当(小林・春日)

最適な場所

「北広島レクの森観察会」

2016年6月19日

札幌市 開米房代

「北広島レクの森観察会」に参加しました。今年は「三角山登山観察会」「森の新緑観察会」と今回で3度目です。北広島レクの森は初めてで行事案内には自然度の高い広葉樹の森とあって、とても楽しみにしていました。ボランティアの方に案内していただいて新緑の森を歩くと爽やかな空気で全身がリフレッシュされる心地良さでした。そこは人が入れる自然に満たされた森でした。

集合場所にあったホオノキは高く、大きな葉で植物ビギナーの私でも分かる木です。わずかに残っている白い花は大きく開き中心の赤と対照して美しく見えました。側に寄れたらと、あの良い香まで想像できました。シナノキはプロペラの葉が付いていて遠くに飛んで撒き散らばるといことです。野幌森林公園で観察したオオバコダイジュも飛ぶ葉がしっかり付いて同じように教えていただいた事を思うと、植物が存続しようとする生命力に感心するばかりです。今回の観察会はシダやランの種類を多く見られてラッキーとの事です。サイハイラン、トケンラン、コケイラン、サカネラン、名前を覚えてもらおうと直ぐ呪文のように皆で繰り返します。それぞれ意味があるようですが覚えるにはそこがこつなのでしょうか、次々聞いて忘れないようにメモして写真に撮る。そして後から図鑑で確認、観察した物と一致すると嬉しくなります。一度に覚えられるものではないのですがこの作業もまた楽しい。

「森の新緑観察会」で、ふれあい交流館前の草原でヘラオオバコを教えていただきました。道端で見かける雑草と今まで気に留めていませんでしたが、ボランティアの方に進められてレンズで見ると短い円柱形に小さな花が密に付いて何とも可愛い、見方でこんなにも印象が違うなんて面白いですね。注意深く見ると気付かなかった事も知ることができるのです。その側にフランスギクが沢山咲いていました。外来種は生態系に関わるといいますが「三角山登山観察会」でタンポポの在来と区別する特徴を教えていただきました。外来種は花を包む集まりが反り返っていて在来のタンポポは反り返っていないそうです。それなら簡単で分かり易いと思って歩くと外来種ばかりでした。唯一見付けたエゾタンポポは茎の所で折られ花がぶら下がっていたのです。観察会3つの約束「①散策路から外れない、②動物、植物を取らない、③ごみを捨てない」この約束は誰でもできる自然を守る行為であると改めて考えます。歩きながら説明を聞き小さな花を側で見たくて踏み込むと足元には山野草がいっぱいです。ボランティアの方によると山野草は帰っても二年とは生きられないそうです。「肥料代をかけて手間をかけて世話するよりこうやって見に来た方が人間にも植物にとっても良い事です。」と教えていただきました。納得です。この自然環境が最適と根を付けている姿はとても貴重なのです。

森深く入って時折聞こえる鳥の声に耳を澄ます、見上げると木々の若葉が空に透けて見え「ワ-きれい」と今日初めて会った人と自然に言葉を交わす。「森に入ると何か良い匂いするね」と言う、「ここは滑るから気を付けて」と声をかけあう、なごやかで楽しくて、時を忘れて歩いていました。心身ともに癒され自然に親しむ事ができました。ありがとうございます。

「北広島レクの森観察会」報告

- 6月18日(土) 観察会下見 ボラレン参加者 8名
前日までの雨のために、斜面となっている散策路には小川のような流れが生じているところが各所に生じていたが、入念に下見を行うことができた。
- 6月19日(日) 観察会 一般参加者30名、ボラレン参加者7名
例年の2倍以上の参加者を得て、会員のヤル気も大幅アップ。天気は、曇天ではあったが寒くも暑くもなく、参加者も大いに満足の様子であった。

観察された植物

- 〈開花〉 サイハイラン、コケイラン、トケンラン、サカネラン、サルメンエビネ、ヘビイチゴ、オオキヌタソウ、オオダイコンソウ、フタリシズカなど
- 〈花後〉 クルマバツクバネソウ、ツクバネソウ、オククルマムグラ、タニギキョウ、ズダヤクシュなど
- 〈蕾〉 ウマノミツバ、トチバニンジン、サラシナショウマ、ヤマブキショウマなど
- 〈スゲ〉 ヒロハスゲ、イトアオスゲ、ヒメシラスゲ、エナシヒゴクサ、ビロードスゲ、サッポロスゲ、ミノボロスゲなど
- 〈シダ〉 オシダ、ミヤマワラビ、ミヤマシダ、ミヤマシケシダ、ホソバシケシダ、ジュウモンジシダ、シラネワラビ、ミゾシダ、ヤマイヌワラビ、イヌガンソク、オオメシダ、ミヤマベニシダ、ナツノハナワラビ、エゾフユノハナワラビ、メニッコウシダなど
- 〈樹木〉 多数につき省略

担当 (佐藤・三輪)

9月27日はキノコ研修会へ参加して秋を満喫しませんか？



当別町にある「道民の森」は森が深くキノコの種類も多いところ。道民の森にもキノコにも詳しい松原健一さんが講師です。

(詳細はエゾマツ117号参照)

特定外来生物 オオハンゴンソウ 防除報告

2016年度のオオハンゴンソウの防除を下記のとおり実施した。

1. 日時；2016年6月30日（木） 午前10：00～12：30
2. 場所；野幌森林公園
3. 参加団体・人数；石狩地域森林ふれあい推進センター4名、北海道博物館1名、自然ふれあい交流館1名、イオングループ3名、一般参加者12名、北海道ボランティア・レンジャー協議会8名
4. 開会式；開会式では、北海道ボランティア・レンジャー協議会、石狩地域森林ふれあい推進センター、北海道博物館の各代表より挨拶を頂いた。次いで、ボラレン事務局より、防除作業の要領および注意点等を説明した。
5. 防除作業；開会行事のあと防除作業地点へ移動。防除の場所は、遊歩道沿いと昨年抜き取り作業を実施した場所の2カ所とし、抜き取り班、運び班、根切り班に分かれて作業を実施した。抜き取り班はスズメバチ対策として、石狩地域森林ふれあい推進センターの好意で準備して頂いた防虫網付安全ヘルメット着用した。

天候に恵まれた作業であったが、27度近く上昇した気温の中で、参加者は汗だくになり黙々と作業を続けた。

本年度の防除本数は昨年度より昨年度より多く（昨年は約30,000本）、スズメ蜂に刺されるなどの事故もなく、予定通り12:30分に自然ふれあい交流館前庭で閉会式を行い無事終了した。



開会式の様子



抜き取り作業前の様子



抜き取り作業の様子



抜き取り後の後始末

北の自然が身近に感じられるひと時

観察会名： 藻岩山登山観察会

観察会実施日： 平成 28 年 7 月 20 日 7 月 8 日 (金)

札幌市白石区東札幌在住 菊地恵子

ようやく夏らしくなり汗ばむ陽気の中、先日は木陰の涼しさや爽やかな風を感じながらの観察会で、楽しいひと時を過ごさせていただき有難うございました。

花びらがくると反り返ったウリの木の花、毛がふさふさしているツノハシバミの実、エゾタツナミソウの花の青と白の美しいコントラスト、エゾアジサイの顔のすがすがしい空色等々、心に残りました。

私は、一昨年の 10 月末に札幌に転居して参りました。道南の出身ですが、30 年程神奈川、東京で暮らし、時折、自然保護団体の自然探索や観察会などにも参加していました。

自然観察会には、何度参加しても新しい発見があります。また、自分の知らない自然のすばらしさに出会わせて下さる指導者の方々には、いつも有難く思っておりました。

観察場所が違えば、その土地なりの自然に触れられ、季節が違えば、同じ場所、同じ植物でも様子の違いが見られるというその楽しさを味わうと、豊かな気持ちになります。

今年 4 月に平岡公園で水芭蕉やエゾリュウキンカ、野幌森林公園でオオバナノエンレイソウの群落を見ることが出来ました。年月とともに体力、記憶力への自信がなくなっているの、もう北海道では図鑑を見比べながらの自然探索はしないかな、と思って越してきた私ですが、私の中の自然への好奇心はこれを機に再び稼働し始めたようです。

そして 野幌森林公園にあった観察会のお知らせパンフレットを持ち帰り、6 月の森の新緑観察会に参加いたしました。小グループに分かれて一緒できた方々の中には、植物好きで博識だったり、多くの観察会に参加されて植物をよくご存じだったり・・・！

交通機関を調べて集合場所に着くまで不安だったのですが、楽しいひと時となり 参加できて良かったと思いました。

さて、今回の藻岩山ですが、昨年春に 2 回登っています。1 回目は、しばらくぶりの登山はちょっときついな、と感じつつも次々と現れるエンレイソウをはじめ高嶺の花々に驚きました。ゆっくり植物を確かめながら登ったら、どれだけの発見があるだろうと思いがら頂上に着き、自宅はどこか探しました。自宅のマンションは、西の窓から藻岩山がよく見えます。札幌市民にこよなく愛されている山なのだと実感しました。

見ようとしなければ、あるものでも見えない、と言われますがその通りだと思います。

この観察会でゆっくりと時間をかけてガイドしていただき、札幌の自然に一步踏み込めたという気持ちがしています。太い太いハリギリの木に巻き付いていた細くはないコクワの木に驚かされました。山を下ったときに、モイワランを確認することができたのも印象深かったです。北海道らしくエゾ〇〇と名の付く植物の他との違いをしっかりと印象付けながら脳トレをして、これからも豊かな時間を共有させていただけたら幸いです。

「藻岩山登山観察会」報告

7月7日(木) 下見: 10:00~14:30 晴れ 気温 26° ボラレン8人

とても暑い日でしたので2時間以上をかけて、ゆっくり観察登山をしました。

観察会当日も暑い予報が出ているので予定時間を1時間延長することにしました。

7月8日(金) 観察会: 10:00~14:30 晴れ 気温 26°

一般参加者22人 ボラレン8人 (4グループ編成)

暑い日で、思いのほか参加者が多く、落伍者の心配をしましたが、参加の皆様は登山と花々などを楽しみ満足された様子でした。

ボラレンの皆様も下見と観察会の2日間お疲れ様でした。

(次年度は下見会と観察会の日にちを開けたほうが良いという意見もありました。)

<見られた動植物>

草本(開花) モイワラン、エゾタツナミソウ、オニシモツケ、ヤマブキショウマ、ウマノミツバ、ダイコンソウ、オオダイコンソウ、ハナニガナ、シロバナニガナ、クルマユリ、イチヤクソウ、ジンヨウイチヤクソウ、ヒトツバイチヤクソウ、ベニバナイチヤクソウ、アカバナ、イワミツバ、アマニュウ、チシマアザミ

(蕾) ハエドクソウ、トリアシショウマ、サラシナショウマ、ホタルブクロ、オオウバユリ、ヨツバヒヨドリ、エゾスズラン、イケマ、タニギキョウ、ノブキ、ヨブスマソウ、エゾイラクサ、アカソ

(実) ルイヨウボタン、トチバニンジン、ルイヨウショウマ、マイヅルソウ、クルマバソウ、チゴユリ、オオアマドコロ、エンレイソウ。(ツルニンジン、アマチャヅル、ミヤマニガウリなどつるものが繁茂していました)

木本(開花) ウリノキ、コクワ、エゾアジサイ、ツルアジサイ

(蕾) マタタビ、ミヤママタタビ、シナノキ、ノリウツギ

(実) エゾニワトコ、ヤマグワ、サワシバ、オオバスノキ、チョウセンゴミシ、ツノハシバミ、ハナヒリノキ、オオカメノキ、ミヤマガマズミ、ツリバナ、ニガキ。(カツラとハルニレの不稔の実がたくさん落ちていました)

シダ類 オシダ、ミヤマベニシダ、リョウメンシダ、イヌガンソク、エゾメシダ、ヤマイヌワラビ、クジャクシダ、イワガネゼンマイ、ジュウモンジシダ、ワラビ、ミヤマシケシダ

野鳥 ヤブサメ、ウグイス、ツツドリ、シジュウカラ、コゲラ

その他 オカモノアラガイ、ヒメマイマイ、サツポロマイマイ、エゾマイマイ、カナヘビ、シマヘビ、ヒョウモンチョウの仲間

担当(菅・三輪)

鷓川研修会に参加して

研修の第一日目は道の駅「四季の館」前の駐車場に集合（午後 1 時）。当会地元会員でもあるネイチャー研究 in 鷓川・門村さんの案内で、まずは観られれば・・・ということでタンチョウ親子を観察し、次いで海岸に行きショウドウツバメの集団営巣と鷓川一帯の広々とした草原に広がる海浜植物を観察すべく、車 2 台に分乗して出発した。参加者は後から加わった 1 名を含めて 8 名。天気は晴れ、やや暑いぐらいで観察日和に恵まれた。

タンチョウ親子に感動して 鷓川には研修会を含めて何回か来ているが、土地勘はないのと同じである。どこをどう通ったのかは全く自信がない。とにかく海岸から離れたこと、周囲は田畑が広がり、よく見渡せ障害物や目標物が少ないところである。農道の脇に車を止め、双眼鏡で探していた門村さんが「あそこに居る！ 頭が見え隠れしている！」と教えてくれ、暫くは見つけられなかった。目を凝らして探していると、点のような黒い頭が見え隠れしながら移動しているではないか！ それも二つ！ タンチョウの親子である。今年生まれた卵から孵った雛鳥が成長し、親の後を追ひ、餌を貰いながら生き抜く術を学習しているとのこと。なんと健気な愛くるしいことか！！

ショウドウツバメの速い飛行を追って 国道 235 号から海に向かう。漁港に向かう途中、左にカーブするところで道路を外れる。その先が崖で、波が近くまで押し寄せていた。また、崖はほぼ垂直に崩れた部分と、その下方に崩れた土砂が堆積した斜面の部分とが明瞭に分かれている。これは、海が荒れ、波が高いとき、浸食が今でも進んでいることが解る。この垂直の崖の部分にいくつもの穴が開いており、時折、ショウドウツバメが出入りしている。ショウドウツバメの多くは上空を舞っており、比較的近くで観ていることもあって、かなり速い速度で飛んでいるように思えた。カメラを向けシャッターを押すものの、飛行速度が速いのと急に向きを変えるのとで、これはという写真がなかなか撮れない。撮れたとしても視野の端っこに辛うじて入っている程度である。

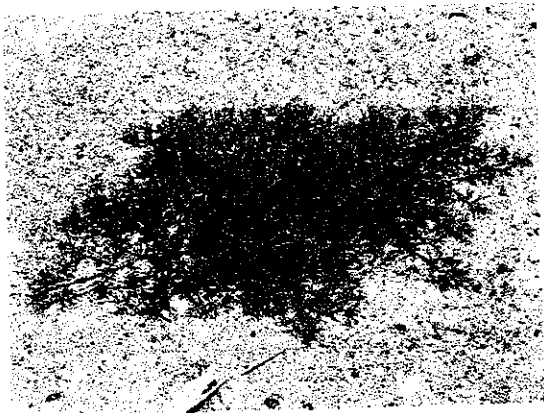
みんなで議論しながらの植物同定 ショウドウツバメをやや暫く観た後、海浜植物の観察を始めようとした矢先、直径が 50 cm を超すような大きな株のオカヒジキが目に見え込んできた。オカヒジキを見るのは 2 度目であるが、最初に見たものはもっと小振りで、これほど大きいのは初めてである。このくらいの大きさに成長するのであれば、栽培し野菜として店頭と並んでいのも肯ける。オトコヨモギとハマオトコヨモギの見極め方は今回初めて解った。また、ヤナギバヒメジョオン、ムラサキウマゴヤシおよびレッドトップ（コヌカグサ）は聞き覚えのある名前前で、本体を観るのは初めてである。この他、話題に上り、私の野帳にメモが残っている植物名は下記の通りである。

○ナミキソウ、○エゾノカワラナデシコ、○ムシトリナデシコ、○ウンラン、○アサツキ、○クサフジ、○ハマエンドウ、○イソスミレ、○マツヨイセンノウ（ヒロハマンテマ）、○ハマニガナ、○ムラサキウマゴヤシ、○ヒロハクサフジ、○ハマボフウ、○コウボウムギ、○ハマヒルガオ。

人工干潟の草刈り 2 日目（7/23）は人工干潟の草刈りである。朝 9 時に人工干潟ゲート前に集合。参加者は地元の人、高校生、わがボラ・レン 5 名を含め、総勢 44 名。車に分乗し人工干潟に入る。天候は晴れ、昨日よりも暑い日である。広さ 2.7 ha の干潟では鎌や刈払機を持つ人、刈った草を集める人、大きなソリを持つ人それぞれ散らばって作業開始する。10 時ごろ

小休止と水分補給。11時過ぎに作業終了。ネイチャー研究会から差し入れられたブタ汁とおにぎりで昼食。人口干潟は草が背丈以上に生い茂り、水面が見られたところでも比較的背丈の低い水草で覆われていた。約2時間半の草刈りであったが、今年のフトイやサンカクイなどの水草はやや小振りであったように思われる。草刈り効果の現れか!?

その他 今回の鷺川研修には特別の思いがあった。タンチョウが鷺川に飛来したのが6年前、雛が孵るのは今年で4回目とのこと。昨年は1カ月近く育った雛がカメラマンに追い回され亡くなったそうだ。今年はその反省から『タンチョウ見守り隊』が3月発足した。その辺の経緯が、4月～6月のマスコミで紹介されていた。私は、昨年秋から今年3月までの間、入院を繰り返し体力を無くしたが、今年是非鷺川に行きたいと思い体力回復に努めた。どうやら念願が叶った。最後に、ネイチャー研究会 in 鷺川の小山内さん、門村さんには研修会・宿泊や草刈り作業でお世話になったばかりか、美味しいメロンまで差し入れていただき、また、早來の川村さんは都合があり参加できないとのことと美味しいトマトを沢山届けて下さり有難う御座いました。 以上



- ・写真1. ショウドウウツバメ
- ・写真2. 大きなカビジキ
- ・写真3. 小休止中のボラメンバー
- ・写真4. 背丈より伸びたフトイ
- ・写真5. 作業終了後の参加メンバー全員

鶴川研修会)	鶴川海浜と田園地帯	
開催日時	平成28年7月22日(金); 13:00~15:30	
天候	曇り18°	
参加者数	ボラレン 8人	
観察記録	草本	<p>【開花】 コメツブウマゴヤシ、ミヤコグサ、ハマエンドウ、ハマボウフウ、メマツヨイグサ、ナミキソウ、ノコギリソウ、エゾカラナデシコ、マツヨイセンノウ、シロバナシナガワハギ、カラマツバの仲間、ムシトリナデシコ、ヘラバヒメジオン、アラゲハンゴンソウ</p> <p>ハマニガナ、ハマヒルガオ、ムラサキウマゴヤシ、キツネノボタン、シカギク、ヒロハクサフジ</p> <p>【蕾】 ハマアカザ、ガガイモ、ガマ</p> <p>【葉】 シロヨモギ、ウンラン、オトコヨモギ、ハチジョウナ、オカヒジキ</p> <p>【果実】 ハマムギ、コウボウムギ、イソスミレ、コウボウシバ、</p> <p>*イネ科のイワノガリヤス、レッドトップ。カヤツリグサ科のフトイ、サンカクイなど</p>
	木本	<p>【開花】 ハマナス</p> <p>【蕾】 イタチハギ</p> <p>【果実】 ナワシロイチゴ、ツルウメモトギ</p>
	シダ	
	鳥	<p>タンチョウ、ショウドウツバメ、コヨシキリ、ノビタキ、オオセグロカモメ、ウミウ</p> <p>* 鳴き声も含まれます。</p>
	昆虫など	<p>カノコガ、オカモノアラガイ、エゾアカガエル、ニホンアマガエル</p> <p>クヌギカレハの幼虫(毛虫)</p>
感想など	<p>タンチョウは今年巣立てば3回目になるそうで、マナーの悪いカメラマンからヒナを守るため見守り隊をつくっているそうです。海岸のショウドウツバメの巣も波に侵食されて心配な状態でした。海浜には上記の他、イネ科とカヤツリグサ科の仲間がたくさん見られました。</p>	

((報告・新谷))

観 察 会 (コース)	夏の森の観察会 (開拓の村～瑞穂コース・瑞穂の池・瑞穂連絡線・記念塔・開拓の沢線～開拓の村)	
開催日時	平成 28 年 8 月 4 日 () ; 10:00～13:30	
天 候	晴れ、29℃	
参加者数	一般参加者 ; 58 名 グループ編成 ; 8 班	ボランティア・レンジャー ; 8 名 (下見 18 名)
観 察 記 録	草本	<p>〔開花〕 ミツバ、ウマノミツバ、ダイコンソウ、キツネノボタン、キンミズヒキ ノブキ、ヨツバヒヨドリ、ミヤマヤブタバコ、ヒメジヨン、ヤマニナガナ、ヤブハキ カノツメソウ、シロツメクサ、ブタナ、アカツメクサ、ハエドクソウ、ミヤマトウバ ナ、オオバコ、ヘラオオバコ、オオハンゴンソウ、ツルリンドウ、オオヤマサギソウ、 ウツボグサ、オオチドメ、ヤブジラミ、オオカモメズル、エゾスズラン イネ科イグサ科、ネズミムギ、オオアワガエリ、コヌカグサ、ヤマカモジグサ、クサイ</p> <p>〔蕾〕 エゾアブラガヤ、シオジ、アマチャズル、ヤエムグラ、アケボノソウ、ヤブ タバコ、ツルニンジン イネ科 エゾカモジグサ、ケチジミザサ、</p> <p>〔果実〕 オオウバユリ、ホウチャクソウ、チシマアザミ、ヤブニンジン ジンヨウイチャクソウ、チゴユリ、ナルコユリ、オオキヌタソウ、ルイヨウボタン イネ科カヤツリグサ科 ホガエリガヤ、クサヨシ、ハルガヤ、カモガヤ アズマナルコ、エナシヒゴグサ、ミヤマジュズスゲ、ヒメシラスゲ、オオカワズスゲ、オニナル コ、ピロードスゲ</p>
	木本	<p>〔開花〕 イヌエンジュ、ノリウツギ、ツルアジサイ</p> <p>〔葉〕 ハリギリ、コシアブラ、カツラ、ミズキ、ヤチダモ、オヒョウ、コナラ、</p> <p>〔果実〕 ミズナラ、ハウチワカエデ、エゾイタヤ、ナナカマド、シウリザクラ ミヤマザクラ、ミヤマガマズミ、オオカメノキ、サワグルミ、サワシバ、ナニワズ ハイヌガヤ、ヤマグワ、キハダ、ツリバナ、ツルウメモドキ、 エゾユズリハ、ホウノキ、ツルシキミ、クリ、シナノキ、ハクウンボク</p>
	シダ	<p>オシダ、ジュウモンジシダ、ミヤマベニシダ、ナツノハナワラビ、ミゾシダ ホソバナライシダ、サカゲイノデ、ホソバシケシダ、ミヤマシケシダ、シラネワラビ イヌガンソク、コタニワタリ、シシガシラ、ホソバトウゲシバ、ヤマイヌワラビ ヤマドリゼンマイ、イワオモダカ、エゾフユノハナワラビ、ワラビ、コウヤワラビ</p>
	鳥	<p>アオサギ、オシドリ、マガモの群れ、ヒヨドリ、クロツグミ、カラ類 * 鳴き声も含まれます。</p>
	昆虫 など	<p>エゾマイマイ、サッポロマイマイ エゾシロチョウ、ヤマキマダラヒカゲ、ミドリヒョウモン、クロヒカゲ アキアカネ、毒グモ (ヤマトコマチグモ)</p>
感想など	<p>8月の一番暑い時期の観察会、歩かなければ汗をかかないが汗がにじみ出る。 ハイヌガヤの実はこの時期、非常にたくさん目立つが秋になれば見つからなくなる。 最後の開拓の沢線の階段はきつい、だけど樹木に覆われた森は涼しい一日でした。</p>	

(担当 室野・新谷)

平成28年度 ボランティア・レンジャー育成研修会実施記録

主催：野幌森林公園 自然ふれあい交流館（指定管理者：一般財団法人北海道歴史文化財団）

共催：北海道ボランティア・レンジャー協議会

開催期間：平成28年8月26日（金）～28日（日）

受講者数：7名

プログラム

8月26日（金）第1日目（10:00～19:00）

開講式

主催者挨拶

自然ふれあい交流館長 松井則彰氏・北海道ボランティア・レンジャー協議会副会長 小林英世氏より開会の挨拶

野外実習【アウトドアゲーム】～自然とのふれあいを楽しむ～

交流館スタッフによるアウトドアゲーム

研修生の緊張緩和の手法として、野外でアウトドアゲームを行い、ゲームの中で自己紹介するなどの手法でグループ結成の雰囲気を出した。

救急法（普通救命講習1）講師：江別市消防本部

野外活動を行う際に如何に救急救命措置が大切であるかをスライドで解説した後救命実技の実習を実施した。

内容 ①心肺蘇生法 胸骨圧迫、AEDの使用方法

②異物除去法 腹部突き上げ法

③止血法、直接圧迫止血法

④骨折に対する応急手当



（4）講義【自然ガイドで何を伝えるか】

講師：鎌田恵実氏（自然ウォッチングセンター）

①自然ガイドをするにあたっては、当然のことではあるが、自然に興味、関心をもち、自然のことを大切に考えて行動することがもとになっている。自然ガイドは自然と人間を結びつける意味で（Interpreter）とも呼ばれる。

②実際ガイドをする際には、自然が好きになってもらうためには五感等を通して直接体験し重要である。

③講義の後半では、セイタカアワダチソウとオオアワダチソウを持ってきて、花、葉、茎などにふれ、直接違いを体験した。

（5）野外実習【ナイトウォッチング】 講師（自然ふれあい交流館 スタッフ）

夜の森林公園の遊歩道を交流館のスタッフが案内、光のない中での距離感、コウモリのを聴ける超音波受信機を携帯し、夜の森を体感した。

8月27日（土）第2日目（10:00～18:00）

（1）講義【リスクマネジメント】 講師：宮本健市氏（北海道ボランティア・レンジャー協議会）

自然の中は楽しいことばかりではなく危険が潜み、ガイドをするには如何にこの危険を回避するかが重要であるかを講義した。

①自然の中には地学的、気象的な要因や生物的要因などによる危険が多くあるので、事故のない観察会にする。

②特にスズメバチに注意する。

刺されないための注意→黒色の衣服を避け、長袖で、香水を使用しない

ハチに出会った際には→ハチが威嚇して飛び回るときには静かにその場を去る。

刺された際には、ポイズンリムーバ等で毒液を吸引、刺された場所を冷やして抗ヒスタミン軟膏などを塗り病院へ。

(2) 野外実習【自然観察会】

～ボランティア・レンジャーの活動の実際～

～自然体験活動の指導法～

野外実習はエゾユズリハコースで、二班体制とし、各班はボラレンの講師が引率し植物の解説、森林公園の概要などを説明しながら実習を実施した。



(3) 講義【自然について～森林について～】

講師：三輪礼二郎氏（北海道ボランティア・レンジャー協議会）

森林の生態などの、大きな視点から日本の森林、野幌の森林公園について話された。

- ①野幌森林公園には原生林はなく二次林で、その生成は陽樹から陰樹、さらに極相として陰樹の森になっていくであろう。
- ②光合成をする緑の森は多くの昆虫や鳥を育て、人間にとっては癒しの空間を形成し、木材資源を生産し、自然災害を防ぐなど多面的役割を担っている。
- ③自然界にはいくつかの大きな物質の循環がある。木々が成長し、一生を終えることを通して植物が利用可能な窒素の循環や他の無機質の循環がある。

(4) 講義【プログラム作成と解説方法（導入）】

講師：小林英世氏（北海道ボランティア・レンジャー協議会）

1. プログラムの作成には、観察会のネタをつくり、そのテーマの意図→下見などをして素材収集→時間配分等の検討→役割分担を決める。
2. 観察会では全体的視野を持ちながらも、植物たちの生態等に五感を使ったりして楽しみを深めながらも人間との関わりなど確かめてみる。図鑑、自作の図表、写真、カードなど補助道具が役に立つ。
3. ガイドをする際、参加者は聞いただけでは忘れてしまうことも多く、見たこと、体験し確かめたことなどは記憶に残る。
4. 植物と人間の関わりでトクサを紹介。トクサが楽器などの板の面を滑らかに削る機能を持ちサウンドペーパーと比較しながら講義をした。

(5) 実習【プログラム作成と解説方法】

～観察会模擬解説～

1. テーマ エゾフクロウの生態 発表 宮本 健市氏

フクロウの分布、形態にふれられる。フクロウの優れた世界にふれ、羽は飛んでも音がしないような仕組みに、首は180度回して周囲を確かめることが可能に、更に、目は人間の100倍の超能力を持っている。

2. テーマ ふみ草植物 発表 小林 英世氏

踏みつけられても元気に育っている植物たち。草原からブタナなどを見ながらその生態を語り合う。

3. テーマ シダ植物について 発表 室野 文男氏

歩きながらシダを見つける。トクサ、ミヤマベニシダ、コゴミなど。その特徴を説明。

室野さんが作成した森林公園の地図をもとにシダの分布にふれる

4. テーマ 植生調査のコドラート調査法 発表 宮津 京子氏

一定の空間を固定して、そこに生成する植物の被度・・・地面を覆う度合・・・、群後・・・分布様式・・・などを調査し、それがどう変わってゆくのか図表、写真など用いて記録する。実際そのエリア内の植物を取上げて記載するなど実習を行った。

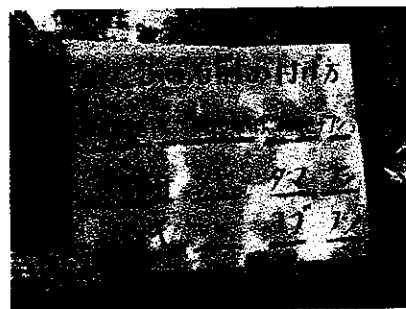
～グループワークによる10分間ミニ観察会プログラム作成～

講師：北海道ボランティア・レンジャー協議会・自然ふれあい交流館

A班、B班それぞれミニ観察会のプログラム作成準備に入る

各班メンバーで真剣なグループ討議開始 テーマは何か、資料の収集、担当者の役割分担などを相談し、テーマをそれぞれ決定した。

A班「ヒッチハイクをする種」 B班「虫こぶの不思議」



8月28日(日) 第3日 10:00～16:30

(1) 実習【プログラム作成】

～グループワークによる10分間のミニ観察会プログラム作成～

午後のフィールド発表に向けて資料の作成や発表の事前予行練習などした。

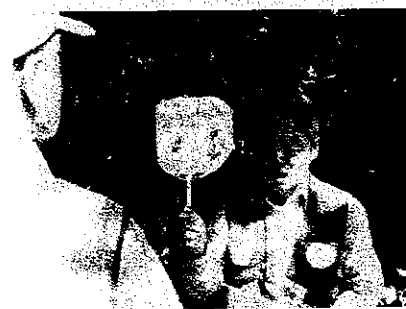
(2) 発表【フィールド発表】

B班 タイトル 「虫こぶの不思議」

キツリフネ、シナノキなどの実物をルーペなどでその形、色彩などを観察してもらいながら説明をする。シナノキハコブフシはタマバエよって葉は赤色に膨れ、幼虫の生活の部屋である。

A班 タイトル 「ヒッチハイクをする種」

植物たちが生きるための戦略・種子の拡散、ヤブジラミ、ノブキ、キンミズヒキなどを観察しながらその様子確かめる。図解などで説明を加えながら。



(3) ふりかえり

～グループごとに発表した内容を振り返る～

講師 安倍 隆氏 (北海道ボランティア・レンジャー協議会)

フィールドで発表したA、B班に反省点を出してもらう。

1. 絶えず改善点を見つけ、今後の活動に活かしてもらう。
2. 安全管理に心がける。
3. 参加者に何を持って帰ってもらいたいのか、その目的(目標)と対象物、その関連を説明するための工夫、演出など。
4. 自然を楽しみの場として。レーチル・カーソンの著書「センス オブ ワンダー」の一説を朗読しながら紹介した。各班の発表に適切な講評をした。

(4) まとめ・講義

【北海道ボランティア・レンジャー協議会とボランティアを行なうにあたって】

講師 春日 順雄氏 (北海道ボランティア・レンジャー協議会会長)

自然観察会の実践的経験を踏まえて<いい案内人になろう>というテーマで、総括的に話された。知識を磨き、センスを磨こう、以下にまとめられた。

- 案内の技術 いい内容、いい説明をめざして
- 自然観 自然への畏敬のきもちを持つこと。野山は植物たちの光合成の大工場であり、その恵みで生物たちは生きている。宮沢賢治などを引用しながら。
- 自然に向き合ってセンス(感受性)を育てること。自分の持っている問題意識や体験などが相互にかかわって志が形成されてくる。<いい案内人>はたえず自然に向き合い、そこから真摯に学んでいくことである。

私たちの仲間は、この研修会でいろいろな分野での講師を担当し、それぞれが自然への深い理解にもとづいた内容の豊かなものでした。

最後に春日会長は<いい案内人になろう>という立場から、独自な見解を語りながら、それらを総合的視点からまとめられ、充実した育成研修会であった。

閉講式

自然ふれあい交流館 松井館長による修了証書の授与、挨拶をもって、三日間の育成研修会を無事終了した。



(以上報告者 新谷良一)

昨年の10月に北海道ボランティア・レンジャー協議会に入会させていただき、ボランティア活動を始めたばかりの新参加者です。ボランティア・レンジャー協議会の目的事項を遂行するには安全なガイドング、適切なインストラクション、質の高いインタープリテーション、ホスピタリティー、コミュニケーションなど多彩なスキルが必要であり諸先輩方の活動を目にし、私も一歩でも早く近づけたらと思っています。ボランティア活動を通じ自然豊かな北海道の魅力を一人でも多くの人に発信できるよう頑張りたいと思いますので諸先輩方のご指導を宜しくお願い致します。

会報「エゾマツ」の原稿執筆依頼にあたり、このような立派な会報誌に浅学菲才な私が投稿するのは気が引け何を書いたらいいのか分かりませんが、自然にちなんだ私のノスタルジー(追憶)を書いてみました。

私のふる里は熊本県阿蘇市でございます。この度の震災におきましては皆様方の温かいお心遣い並びにご支援を賜り実家に成り代わり厚く御礼申し上げます。

阿蘇は外輪山と数個の中央火口からなり、外輪山は南北25km、東西18km、周囲128km、面積380km²の広大なカルデラ地形を形成し、カルデラ内部にできた中央火口群(東西一列に根子岳・高岳・中岳・杵島岳・烏帽子岳)により二分され、北は阿蘇谷(現:阿蘇市)南は南郷谷(現:阿蘇郡南阿蘇村、高森町)と呼ばれています。

主峰は高岳で標高1592m、カルデラ内平坦地約500m、外輪山約800mで、気候は太平洋側気候であるが夏は冷涼、冬は寒く、また降雨量も多い地方です。

青い空に噴煙たなびく阿蘇の山や、広大な緑の草原・高原の外輪山、清らかな湧き水と波打つ水田等の自然豊かな古代の里でもあります。

エピソードI 魚捕り

どじょう(泥鰌)

ドジョウ、童謡「どんぐりころころ」の“ドジョウが出てきて今日は”のドジョウでございます。この童謡を知らない人はいないと思いますが作詞家は(青木在義 アオキナガヨシ)なぜドジョウを選んだのでしょうか、皆さんも考えてみてください。私の浅学菲才な頭で考えればドジョウの姿・形・仕草がユニークで身近に居たと云うことです。

これがナマズとかウナギが出てきて“今日は”ではしっくりしません。あくまでもどんぐりに対してバランスのとれたもの、つまり可愛いもの=小さい物です。例えば赤ちゃんはどんな動物でも可愛いし小さいものです。唱歌(童謡)に出てくるメダカ・カエル、トンボ・蝶々・カラスその他(馬、象だけはちょっと大きいかも)また、ドジョウの濁音の響きがいいのです。響きが良く人気のあるものを掲げるとゴジラ、ガメラ、ガンダム、ガッチャマン、バイキンマン、ドラエモン、ゲゲノキタロウ等、ブランド品ではグッチ、ヴィトン、ブルガリー、ジバンシー、ブ



ラダ、香水ではゲランなどなど（これはフランス語？）ドジョウと云う名前はメジャー級の商品名と同様な響きを持っており、また江戸時代より庶民に親しまれた魚でもありこれも一要因だったのではないかと思ったりもします。ドジョウはとにかく可愛い魚でまず姿が小さく胴体が丸い（丸いことも大事な要素、アンパンマン、ドラエモン等）顔がコミカルで仕草が非常に面白い、皆さんも機会があれば一度ゆっくり眺めてください。

私の少年期の環境は家の横に小川（*井出とも言う）があり綺麗な湧き水が流れ周囲は竹林と鎮守の森、外輪山のふもとまで続く田園でございます。（阿蘇地方は湧き水が豊富）

小川せせらぐ岸边にはフキ、ギシン（ギシギシ）、スゲ類、カヤツリグサ類、セリ、タイワンゼリ（オランダカラシ＝クレソンともいう）等が繁り、川底は泥土場所によっては砂礫で、田植え前に近所総出で井出さらいを行います。（井出さらいはヨナ（火山灰）、汚泥等が堆積するためこれらを取り除く作業のこと）

生息している生物は、魚類：メダカ、ドジョウ、アブラメ（アブラハヤ）、ハヤ類、ドンコ、（カジカ）フナ、コイ、水生昆虫：ミズスマシ、アメンボウ、ゲンゴロウ、タガメ、*タイコウチ、ミズカマキリ、トビゲラ、カワゲラ類、ヤゴ、ホタル等、貝類：タニシ、*カワニナ、シジミ、甲殻類：サワガニ、カワエビ、両生類：ワクド（カエル：ヌマガエル等、トノサマガエル、ヒキガエル、アマガエル、イモリ、爬虫類：アオダイショウ、シマヘビ、アズキヘビ（ヤマカガシ）ジムグリ、イシカメ（マムシは小川の付近には生息していなかった）大きな川にはナマズ、カマズカ等が加わり、古川（河川工事で取り残された川：三日月湖と同じ）には、*タナゴ、ミゾガイ（おそろくドブガイと思われる）等が生息していました。

【ドジョウ捕りその1】

ドジョウウケによる捕獲

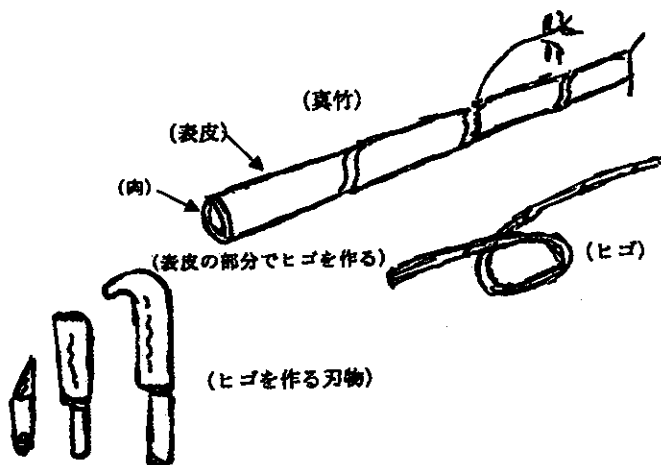
ウケ（筥）はご存知の方もいらっしゃると思いますが筒状で入り口は漏斗状になっており、魚がいったん入ったら出られない漁具で他地方ではドウとも呼ば



(ウケ)
(漏斗状の返し)

れ、形、材質等様々なものがあります。

ウケは自家製で真竹の直径5～6cmを使用し竹ヒゴで編んで作ります。当時は物資が不足しており全て自家製です。先ずヒゴ（籐）の作り方ですが真竹の大きく長いものを使用し先の方に十字に切れ目をいれ十字に組んだ木片を挟み木片を根元の方にたたきながら割っていき（根元から割ると不規則な割れ方をする）四本に割れたものをさらに専用の鉋で



等分し細かくし、細くなった竹を表皮と肉の部分に割り、表皮をヒゴとして使用します。筒本体も40～50cmの輪切りにしたものを使い竹の節下を5cmほどのこし等分に割り、割った部分を表皮だけにしてヒゴで編んでいきます。漏斗状のかえしの部分は別に編んでそれを本体に取り付けて出来上がりです。

田んぼは苗代に始まり、田耕、代掻き、田植えと続きます苗が大きく成長したころが漁期（7～8月）となります。

数個のドジョウウケを用意し、中に餌を入れますが餌は米ぬかを鍋で焦げるほど煎り、タニシを潰し粘土と一緒に混ぜ塊を作りウケの中に入れて準備万端となります。夕暮れとともにこれを担いで行って田んぼに仕掛けます。場所は*水口の周囲に仕掛けるのが一番で、田んぼの水は水口から全体に広がるため餌の臭いも広がりドジョウが集まりやすいからです。

夕暮れ時の田園はカエルの大合唱に蛍が乱舞し子供心にも何とも言えない気分になります。ただ田畔（あぜ道）は狭く滑りやすいためよそ見していると田んぼに落ち込み泥だらけなることがあります。

翌日夜明けと同時にウケを回収にいきますが期待度で胸が高鳴ります。成果はウケを水から上げるとすぐにわかります。ウケも重く沢山のドジョウがうごめき、ウケの周囲に泡がでて鳴き声も聞こえます。ウケを持ち帰りメゴ（竹籠）に移し替え泉水で食材になるまで蓄養します。このとき大豆を入れますが何故か理由はわかりません。（泥抜きなのかまさかドジョウの餌？）泉水は湧水を利用しているため綺麗でコイ、フナ、ハヤ等が泳いでいます。

蛍とりは子供たちの楽しい遊びの一つで夕暮れ時になると近所の子供たちが手にハエ叩き、庭箒を持ち集まり、小川、田んぼの淵を歩きながらハエ叩き等を振りかざし捕えるのです。取った蛍は牛乳瓶に入れます。蛍は手で捕えることもできますが独特の臭いを持っており手ではあまり触りません。

捕えた蛍は家に持ち帰り蚊帳の中に放します。蚊帳の中で蛍の幻想的な光を見ながら深い眠りにつき朝には全部外に放してしまいます。

ハエ叩きといえば懐かしい思い出があります。ハエ叩きは当時塩化ビニール製などあるはずもなくシュロの木で作ります、シュロの枝を切り葉の方を適当長さに切り裂いて編み上げれば出来上がりです。シュロの樹皮はシュロ縄としても使用します。

私が兄弟喧嘩で姉を泣かすとじい様（祖父）がハエ叩きを振り上げ「このクソワクドが」と叫びながら怒ります。私も負けてはいません。じい様の動きが遅いの

(シュロのハエ叩き)



を知っているため「農学生が屁を放った、幾つ放ったか十う放った、チョチョイノチョイ」と小指と小指クロスさせ囁きながらからかいます。じい様はさらに怒りますが私は決してじい様を馬鹿にしているのではなくむしろ尊敬し愛していました。ただ姉の方をかぼうのが気に入らなかったのかも知れません。

ただ、いまだに「クソワクド」と「農学生」の解釈に悩みます。じい様は私をカエルにたとえて言ったのか（ツチカエルをクソカエルと呼ぶ地方もある）それとも「この悪童が」といったのか今生きていれば聞いてみたい気がします。

また、農学生については近くに農業高校と実習農場があり学生が家の横の通りを行き来します

が、たむろしていると声をかけてきますが、ふざけて学生にじい様にしたのと同じことやって一目散に逃げた記憶があります。まさか脳のない学生（頭の悪い学生）をもじった言葉かとも思ったのですが、あの頃の学生は尊敬されておりました。卒業生は農林省の役人（公務員）、獣医等結構いましたし何か大人の雰囲気漂わせていました。（当時は農業高校を農学校、学生を農学生と呼んでいた）

大人をからかうなんて何と云う「クソ餓鬼」だったんでしょうか、理由なき反抗？（映画の題名）、でも今では立派な「クソじいじい」となりました。

【ドジョウ捕りその2】

ショウケすくいによる捕獲

ショウケとは阿蘇地方という竹ザルのことで、ショウケでドジョウを掬いとるのであります。

皆さんご存知の島根県の安来地方の郷土芸能で有名なドジョウ掬いのそれなのです。ショウケは踊りで使

われているザルとは姿かたちが違い楕円形でタッパがあり大きく頑丈にできており、本来は糶等を掬ったりする物ですがドジョウ掬いには最高でチョット拝借といった感じで使います。掬い方は踊りと一緒ですが水草が繁っている場所の下流側にショウケを設置し片手でショウケの端を握り片足で水草を踏みながらショウケの方に追い込んでいき素早くショウケを上げます。（ドジョウ掬い踊りを想像してください）

ショウケの中はドジョウのほか色々なものが入っておりコブナ、メダカ、ゲンゴロウ、ヤゴ、カワニナ等、ドジョウは大きい物をヤマドジョウ、小さいものをカナクギドジョウと呼んでおり、大きい物だけをとりコブナは泉水に放しますがこれらはカワセミとかゴイサギに食べられいつの間にかいなくなります。

【ドジョウ捕りその3】

ドジョウ釣りによる捕獲

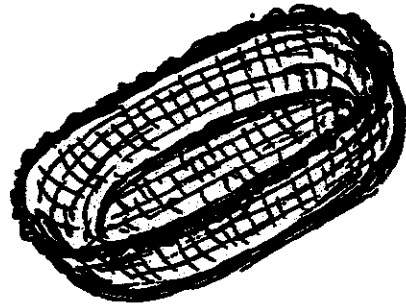
ドジョウ釣りは子供の遊びで二通りあります。一つは釣り針を使う方法もう一つは馬のしっぽの毛で括って釣る方法で、釣り竿は真竹の細く長い物を用意し曲がりのあるものはワラ束を燃やし炙って真っ直ぐにします。

釣り糸は化学繊維の物は少なくおふくろが使用していた木綿糸、オモリは投げ網（投網）のオモリとして使われていた鉛を、金槌で叩いて薄くのぼしそれを小さく切って使います（小石でもよい）。ウキはタラノ木を数センチに切り、キリで穴をあけ小枝の軸を通して使います。（ドジョウ釣りにはウキは使わない）

チョット変わったところでクリムシ（栗の葉につく白い毛虫：クスサンの幼虫）の大きいのを捕え真ん中を裂き両方に引っ張ると腸のような物（絹糸線）が出て、これを杯に酢を入れたものに

浸すとテグスが出来るが、やり方が悪いのかすぐ切れるためあまり使用しませんでした。

小川を覗くと、ドジョウは泥の中から頭だけを出しているもの、また全体をさらけ出している



（ショウケ）

ものがおり、釣りの対象になるのは大きく主に泥から頭をチョトだけ出しているものが面白く、餌はご飯粒を小針につけドジョウの穴付近に置くとドジョウはうんなんだ？という顔をしてキョロキョロあたりを見回し穴から体を少し出します。餌を移動させると、何んだ、どこ行ったんだという仕草で穴に引っ込みます。これが面白くて何回か繰り返し穴から釣り上げます。

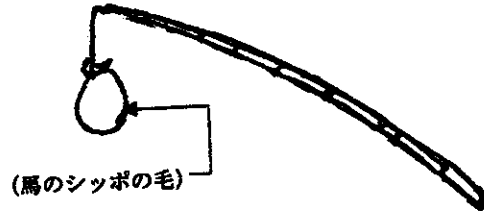
(白い毛)



(粟ムシ：クササビの幼虫)

馬のしっぽを使用した釣り

釣りは簡単でドジョウを縛り上げてとる方法で、馬のしっぽの毛を一寸と拝借(馬を飼っていた)といった感じで、毛を釣り竿に結び毛先にくくり輪を作りこれでドジョウを縛り釣り上げるのです。ドジョウは全体をさらけ出しているものを頭から輪を通し胴体の真ん中あたりを括り引き上げます。



【ドジョウ捕りその4】

掘り起こしによる捕獲

初冬、田んぼの水口付近をヨッ鯨(四本になつている鯨)で掘り起こすと土の中からドジョウが出てきます。(冬眠中?)

【ドジョウ捕りその5】

ドジョウを使ったレシピ

ドジョウを食材としたレシピは、ドジョウ汁、柳川鍋、蒲焼、から揚げ等あるが定番はやりドジョウ汁である。

我が地方の作り方はまず鍋に食用油(菜種油)を多めに入れ高温になったところでドジョウを一気に投げ込みフタをかぶせ落ち着いた時点でドジョウを潰し水を足します。味は味噌仕立てで通常の具のほかにゴボウの茎、里芋の茎を入れるのがみそで独特な風味を醸し出します。(私はあまり食べなかった。取るのが好きなだけ)当時ドジョウ等は重要な蛋白源でもありました。

以上がドジョウにまつわるエピソードで今回はこれまでとします。

***ドジョウ：コイ目ドジョウ科**

日本のドジョウの種類：3亜科6属11種のドジョウが存在することと、ドジョウ、シマドジョウ、スジシマドジョウ、ヤマトシマドジョウ、イシドジョウ、アジメドジョウ、アユモドキ、ホトケドジョウ、ナガレホトケドジョウ、エゾホトケドジョウ、フクドジョウ、大きさは種類により5～20cmで大きいものになると20cmを超えるものもあり口髭の本数も異なる。

北海道にはドジョウ、フクドジョウ、エゾホトケが生息していてエゾホトケは絶滅危惧種（En）に指定、ドジョウは鰓呼吸のほか、腸呼吸、皮膚呼吸もできるため少々の環境悪化でも生息することができる丈夫な魚であり、名前の由来もこの辺から付いたものと言われている。

***タナゴとドブ貝の関係：**タナゴは二枚貝類に産卵し孵化した仔魚もしばらくは二枚貝の体内で生活するのが特徴で産卵に利用する二枚貝を産卵母貝と云う。

2014年5月19日千歳民報で、千歳川のカワシンジュガイが大量に捕獲されタナゴ愛好家へ売買か、保護の取り組み急務と云う記事が出ていたがこれはまさに産卵母貝として利用するためである。

二枚目の種類には魚類の鰓や鰭に付着するするグロキディウム（胎生で幼生）と云う幼生期がありこの時期は淡水魚各種の鰓や鰭などに食いついて皮膚の中に潜り込み長期間寄生し1親貝から離れた場所に分布を広げる。

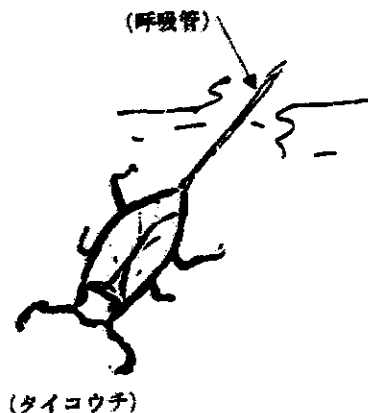
千歳川のカワシンジュガイもサクラマスなどの魚を宿主に、より低温で生息に適した河川上流に移動する習性があるそうである。

***カワニナ：**カワニナ科に分類される巻貝の一種で淡水域に棲む細長い巻貝で水生虫幼虫の餌としても知られる。

***水口：**（みなくち、みずくち）とも言い水田の水を取入れ、取出しを行う所で、場所は水田と水田の間の畔部分、ここで水田の水をコントロールする。※米づくりは水田の水管理が重要な要素の一つである。

***井出：**井出とは農業用水路で、加藤清正が作らせた「花ぐり井出」は独特な工夫がなされおり有名である。

***タイコウチ**



近づけば、見えなかったものが、見えてくる

俯瞰すればわかる事があり、一方虫眼鏡の目でわかることもある。 木村益巳(伊達市)

【カゲロウ=蜻蛉】

はかなさの代名詞になっているカゲロウ。子供の時代は水の中で暮らしているが、親になると空中に飛び立つ。

繁殖だけの為に短い時間を生きている。その為か口が退化してしまった。ところが面白いことに、こんなに生きる時間が短いにもかかわらず、幼虫から成虫になる間に亜成虫を経る。写真は亜成虫の皮を脱いで成虫になった直後。なぜこんな無駄とも思われる事をするのか、不思議だ。



【ヤゴ】

これは、オニヤンマらしいのだが、口の位置にあるギザギザに注目していただきたい。ハンターであるヤゴは、この飛び道具を使って獲物を捕まえる。アゴが進化したもの。写真はヤゴの抜け殻なのだがこの迫力はどうだ。



【ザリガニ】

写真はニホンザリガニ。日本の固有種で北海道と北東北にのみ分布。生息環境がせばまり絶滅が心配される。国の絶滅危惧種。秘境小幌で、小学校2年生の女の子が見つけた、つかんでいる写真。おなかには卵を抱えている。ところでザリガニの脚の数は?ハサミを入れて10本。タラバガニはヤドカリの仲間で8本。ではエビは?脚の数



が多そうですね。不思議の連鎖は広がるばかりです。好奇心は若さの秘訣かも。



近づけば、見えなかったものが、見えてくる

俯瞰すればわかる事があり、一方虫眼鏡の目でわかることもある。 木村益巳(伊達市)

【ゲンノショウコ(現の証拠)】

花にぐっと近づいてみた。白い花びらの中心のメシベは赤く、



オシベが青紫色で美しかった。オシベの葯からとても小さな丸い粒の花粉が出ている。粒粒に隠れるよう

に、これまた小さな虫がやって来ていた。花粉を食べに来たのだろう。大きさは葯の長さと同じくらい。葯の長さ約0.7mm、葯についている花粉の粒はそのまた

1/10。ちなみに花卉の大きさ約12mm。雌しべ(柱頭)にはすでに花粉粒がついて、種になる準備が完了している。別名ミコシグサ。実のついたときのお神輿にたとえた。種を遠くに飛ばすためのバネ仕掛けもなかなか凝っている。飛距離1~2mと金メダルもの。



【イタチハギ(鼬萩)】

クロバナエンジュともいわれ、道路わきの斜面などで時折見かける、低木の帰化植物。マメ科なので窒素を固定し荒地でも良く育つ。黒紫色の筒型の花で橙がかかった花粉のコントラストが不思議な魅力を作っている。

やってきたのはマルハナバチ。後ろ足に大きな花粉団子をつけている。これだけ集めるのには、随分時間がかかったんだろうな一、と思う。子育ての為にせっせと働いているのだ。マルハナバチは同じ種類の花を訪れるから、花にとっては歓迎される虫と言われるが、花粉団子の色からもそれは正しいようだ。これは、エゾヒメマルハナバチと思うのだけれど、高山性の記述が気になる。



「キノコ採り散歩」(タモギタケ編)

札幌市 松原健一

夏なのにキノコができるんですねとよく言われるが、タモギタケはまさに夏のキノコで、道民の森(一番川地区)では6~8月に繰り返し採れます。タモと呼ばれるハルニレの倒木に広がった黄色い傘は鮮やかで美しい。勤務のついでに大量に採取できたので、日記風に書いてみました。

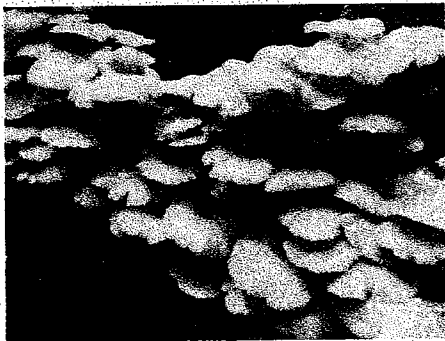
◎H28. 5. 26 (金) 曇り、晴れ 25~15℃ 自然体験キャンプ場P横

一番川地区の開園準備の勤務で、今シーズン初めて、幼菌を見つける。高温のためか例年より早い。

◎H28. 6. 11 (土) 晴れ、曇り 20~12℃ 案内所前の沢奥15分

藻岩山きのご観察会(特別観察会、山菜目的)があり、メンバー9人と15分ほど沢の中を歩き、数年前に見つけたハルニレの倒木(直径:50cm、長さ:20m)を見に行く。今年1回目の発生で、丸太全体に発生していたが、幼菌が大部分で、量的には手提げカゴ1つしか採れなかった。その後、行く機会がなかったので全部流れたと思われる。

◎H28. 7. 1 (金) 晴れ 25~15℃ 案内所前の沢奥15分



久しぶりに行ってみると、雨と高温のためか2回目の大発生(幼菌が丸太全体にみられる)にぶつかった。3日後の7月4日(月)には見事に採り頃の成菌となっていた(写真左)。感動して思わず拍手してしまう。買い物袋(大)に5袋の大収穫。同じ日に、オートキャンプ場すぐ横の草原にも(ハルニレの倒木、直径:40cm、長さ:5m)大発生していた。こんな日が年に数回あり、キャンプ場の仕事(巡視)は止められない。

◎H28. 7. 5 (月) 晴れ 23~15℃ 体感の森広場横



前日2カ所で大発生が見られたので、これかと思ひ、夜勤明けの早朝、川を渡ってすぐの体感の森広場周辺を見廻る。以前から気になっていた倒木(直径:70cm、長さ:20m)に、大発生しているのを初めて見つけた(写真左)。2日間で採取したものは、おすそ分けしたり、一口大に切って冷凍保存(ジップロックL5袋、M4袋)。過去最高記録となった。

◎H28. 7. 20 (水) 雨、曇り 23~19℃ 案内所前の沢奥15分



2週間ぶりに、行ってみると、3回目の発生が見られた。しかし、全体に発生はなく川側の3分の1程度に幼菌が見られた。

◎H28. 7. 23 (土) 晴れ、曇り 26~17℃ 案内所前の沢奥15分

この日は藻岩山きのご観察会(E班定例観察会)があり、メンバー15名で沢の中をキノコ探しながら行く(写真左)。カゴ

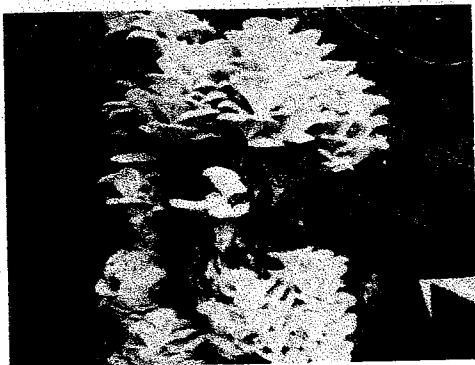
1つの収穫。いつも1人だと、他のキノコは目に入らないが、15名だと色々なキノコが見つかった。
 ・ニガクリタケ・フチドリツエタケ・ウスヒラタケ・ザラエノヒトヨタケ・アラゲコベニチャワンタケ
 ・チャコブタケ・ウスバタケ・クロハナヒラタケ・タモギタケ・ウラベニガサ・ホソツクシタケ・スエ
 ヒロタケなど12種類もあった。

◎H28. 8. 2 (土) 晴れ、曇り 29~21℃ 案内所前の沢奥15分



10日後に来てみると、完全に流れていた(写真左)。きれいに取り除く。こうすることで、次の発生を促す。夏場のキノコは痛みが早く、採り頃から3日もすればダメになる。仕事のついでなので、毎日という訳けにはいかず、このような悔しい場面にはよく出会う。街の公園にはニレの倒木がなく、早朝散歩コースでは見たことはない。

◎H28. 8. 12 (金) 晴れ 30~20℃ 体感の森広場の隅



オートキャンプ場の川向いの体感の森広場は、遊具(モグラトンネル、空中回廊)があり、いつも巡視で見廻っている。広場の隅の枯れた立ち木(直径20cm)に発生していた(写真左)。遠くからでもそれと分かるので、今まで見逃していたのではなく、今年初めて発生したものと思われる。段ボール箱1箱分の収穫。しかしこの頃になると固くなり(シナイ)食べるのに細かく切るなど工夫が必要。

◎H28. 8. 19 (金) 晴れ 28~21℃ 体感の森広場横

7月5日に大発生した木のその後の様子を見に行く。5日以降今日まで数回行ったが、すぐ隣の倒木に少し出ている程度。今日は上方3分の1であるが大発生していた。買い物袋3袋の収穫。お盆、小学校の夏休みが終われば、キャンプ場も平日はガラガラで仕事も無くなり、タモギタケ採りも終了。

◎これからのキノコ情報

8月下旬は残暑厳しく、涼しくなる秋までの間、夏キノコから秋キノコへの端境期に当たり、しばらくはキノコも見られない。9月中旬にはハタケシメジ、ラクヨウ、ボリボリなどの秋のキノコがワンサカ出始める。今回は、ラクヨウ、ボリボリのいずれかを取り上げてみます。

《タモギタケの見分け方》(藻岩山きのご観察会発行の図鑑より抜粋)

- ・形態：傘は径2~10cm程でまんじゅう形~開くにつれロート形になる。表面は吸水性があり鮮黄色~淡黄色で、しばしば綿毛状細鱗片を付着させる。ヒダは白色~淡黄色、やや疎で長く垂生。柄は長さ2~5cm程で白色~やや黄色。基部でお互いに癒合し、またしばしば分岐し、通常は中心生で円柱形。髄状。肉は白色で多少紛臭がある。胞子紋は白色~淡紫灰色。胞子は円柱形。
- ・発生環境：主にニレ類、その他ナラ、カエデなど広葉樹の立木や倒木、切り株上に東生~群生。
- ・発生時期：6月~9月頃
- ・食べ方：オムレツ、グラタン、汁物など ☆優秀な食用菌。

8月24日より、7泊8日の予定で前半は北アルプスの唐松岳から五竜岳をめざし、後半は石川県の白山をめざす山旅です。

白山と名のつく植物がたくさん咲いている、言わずと知れた花の名山です。以前から憧れていた山なのですが、自分の体力、気力等を考えるととても無理では？と思っていましたが、声をかけて下さる方がおり足手まといになり迷惑をかけるのではと随分迷いましたが白山という名の誘惑には勝てず行くことに決めてしまいました。

それからはヤマケイアルペンガイドを購入し、白山の勉強を始めました。石川、岐阜両県にある火山で海拔2702メートル、水神、竜神、死霊などのこもる山で古くから崇敬され、靈亀2年泰澄大師が白山めざし幾多の困難の末、山頂に到達し、2017年に開山より1300年を迎える歴史ある山なのです。

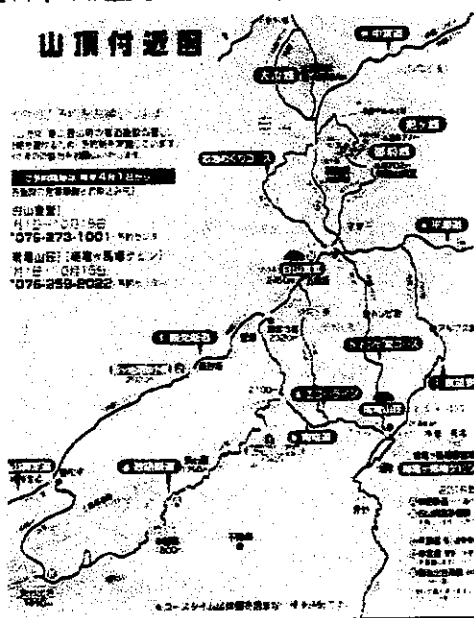
前日は金沢に泊まり、駅前からバスに乗り、登山口の別当出合まで2時間の旅でした。何となく寝不足気味で寝ていこうと思いつつながら車窓の風景に心を奪われそれどころではありません。寝ておかないと登りが辛いと思いつつながら一睡もできませんでした。

別当出合に到着後、トイレ、準備体操、荷物の整理をし、大型バス2台分の老若男女が一斉に登山の開始です。ガイドさんと年配の女性3人パーティーの私たちはゆっくりしたペースで1250メートルの登山口から今夜の宿泊地、室堂の2450メートルへ

標高差1200メートルをのぼらなければなりません。後発の若者たちに追い越されながら、めげる事なく自分たちのペースで歩きます。シモツケソウ、カライトソウ、シロウマシャジン、タカネマツムシソウ、キヌガサソウと次々に現れるお花たちに夢中になり、息つく暇もありません。シロウマフウロの色がピンクでとても素敵です。お目当てのクロユリ、ハクサンコザクラはなかなか姿を見せてはくれませんがシナノオトギリの黄色の花びらが陽に輝きこっちを見てと言っているようです。

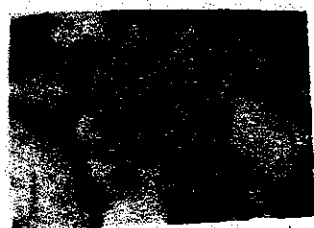
30分歩いては水分を補給し、1時間で行動食を口に、滴り落ちる汗と苦闘しながら歩くのですが目的地はまだまだです。前日に仕入れたパンとコーヒー

山頂付近地図

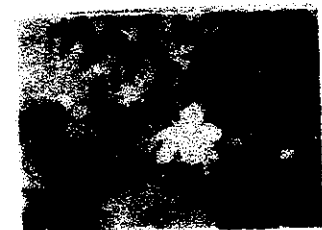


で昼食を済ませ、またまた登ります。楽しみにしていたオタカラコウに出会うこともできました。何か良いことに会うことが出来そうです。コースタイムを大幅に超え、よたよたの足取りで室堂に到着しました。人、人、人にビックリです。今日の宿泊者は 500 人程度、明日は 600 人と聞きまたまたビックリ！北海道の山では考えられない多人数の人たちが登る山なのです。汗だくの衣類をさっぱりした物に着替え、食事の時間を待ち焦がれ、美味しい夕食をいただきました。ちなみに夕食は交代制で到着の順番に食べることが出来るそうです。

明朝は早くから御前峰に登頂ですが私は下りの体力も残しておかなければとの思いで断念しました。ここまで来られただけで十分です。



タカネマツムシソウ
まつむしそう科



シナノオトギリ
おとぎりそう科(全域)

皆が登っている間に会いたかったクロユリ、ハクサンコザクラに出会うこともできました。皆と落ち合い頂上の様子を聞きながら観光新道を下山です。かなりの急坂に難儀しながら、目前のお花畑に圧倒され言葉もありません。見渡す限りの斜面は様々なお花でいっぱいなのです。いちばん良い時期に来ることが出来て幸せでした。誘ってくれた友人に感謝の気持ちでいっぱいです。あとは怪我がなく帰宅できる事だけを願い全神経を集中してひたすら下山するだけです。疲労と急坂に言葉もなくへろへろになりながらとにかく別当出合までたどりつかなければなりません。なんとか乗る予定のバスに間に合いました。友人の買ってくれたソフトクリームの美味しかったこと。

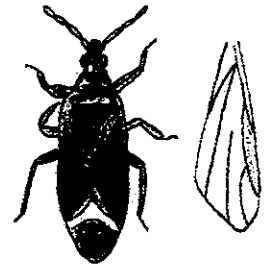
金沢駅前まで戻り、近くの温泉で汗を流し楽しかった山旅を肴にビールで乾杯、ホテルに戻り爆睡したのです。

そうではありません。いつまでも眠ることができませんでした。五竜岳の登りで体力を使い果たしていた私の白山は散々たるものでした。自分の力量を正しく把握していなかった罰でした。同行の皆に大変な迷惑をかけてしまい、不完全燃焼のまま終わってしまった今回の登山はいくら悔やんでも悔やみきれるものではありません。今後の生活にこの経験を生かしていくことが私への宿題になりました。本当に良い体験ができたことと白山のご利益だと受け止め、謙虚に毎日を過ごしたいと思います。

雪虫とカメムシ

苫小牧市 谷口勇五郎

10月16日、白老に雪虫が大発生したとの新聞記事がありました。次の日は苫小牧でも大発生でした。雪虫とは体に白いロウ物質を持つアブラムシの仲間で、雪の降る前に現れるものです。そのうちトドノネオオワタムシ（以下トドノネ）が有名です。夏はトドマツの根から養分を吸い、単為生殖で3~4世代を過ごし殖える。晩秋、羽のある雪虫となってトドマツの根元を飛び立ち、ヤチダモに着き、幹を降り、雌雄の幼虫を産む。その幼虫は餌を取らず、数回脱皮し成虫（羽なし）になり、交尾し、卵を1個産む。卵で越冬し、4月下旬にふ化したものはすべて雌（幹母という）で、ヤチダモの芽や葉から養分を吸い、単為生殖で雌だけを産み、その世代は羽を持ち、トドマツに移動する。このような生活史を繰り返しています。



左はクロハナカメムシ
右は雪虫の羽

次の17日、雪虫を実体顕微鏡下で20匹ほど解剖しました。トドノネは体長が3.5mm、羽長5mmでロウ物質を持っています。全部が雌で腹には雄虫のもと（体長0.5mm、生まれたときと似たような形）は殆ど4匹（たまに2とか3）と、雌虫のもと（体長1mm）は4~6匹（2~10のぼらつき）です。ヤチダモの幹に付着している多数の幼虫を産んだ後の抜け殻を見れば、幼虫のもとが残っているものはなかったのので、全部産み切っているようです。

ところが大発生したものはロウ物質を持たず、より小型で体長が1.5mm、羽長が3mmほどで、体内の幼虫のもととはトドノネの半数ぐらいで大きさも約半分です。この虫の名前は判りません。

金太郎の池の公園（苫小牧）には直径40cmのケヤキ（本州以南）が2本、植わっています。ケヤキの葉に袋状の虫こぶを作るケヤキフシアブラムシというものがあります。6月頃、虫こぶから脱出し、ササの根に寄生し、秋に羽が生じ、ケヤキに戻るそうです。20日金太郎の池のケヤキに行きました。幼虫を産んだ後の抜け殻が累々と幹に付着しています。腹部は殆どなくロウ物質の有無は分かりません。幹の裂け目に小さな幼虫が生きていました。樹皮上をルーペで見ると、小さなカメムシがアブラムシの子をあさるように、2匹歩いていました。そのカメムシを採集して帰り、ネットで調べると、ケヤキフシアブラムシを食べる天敵のクロハナカメムシ（体長4mm）でした。ケヤキと一緒に両者は密かに北海道に来ていたのです。23日、例の小型の虫が自宅辺りに沢山飛んでいました。しかし、5km離れた金太郎の池では1匹も見られませんでした。体長も羽の脈も同じようですが、同種か否かは判りません。

11月12日、花巻市で同級会のあった次の日、ホテルを出て街中を散策しました。ある民家脇に、一抱えのケヤキが3本植わっていました。黄葉し、半分ぐらい落ちていました。残った葉をよく見ると、たった1枚だけに袋状の虫こぶがありました。どの幹を探してもケヤキフシアブラムシは1匹も付いていません。勿論、クロハナカメムシもいませんでした。虫こぶのでき具合から考えると、そのアブラムシと天敵との力関係から大量の発生はなかったのでしょう。

（注）2015年作成

自然観察NOW

No.12

野幌森林公園自然情報

発行：2016年6月5日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

命をつなぐ

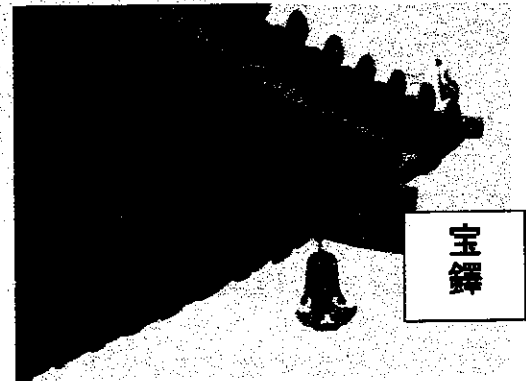
ホウチャクソウの話



<名前の起こり>

堂塔の軒の四隅などにつるす大型の風鈴を風鐸ふうちやく、宝鐸ほうちやくといいます。

ホウチャクソウの花の咲く様子を宝鐸に見立てて、ホウチャクソウと名付けたのが起こりです。



<疑似一年草です>

茎を伸ばし、葉を茂らせ、花を咲かせ、実を稔らせるのに、根に蓄えた養分を使い果たして枯れてしまいます。枯れる前に、ラメット（栄養繁殖体）を作り次の世代に命を引き継ぎます。多年草とばかり思っていました、疑似一年草と言います。

<春植物より遅れる林床植物の代表>

5月22日、三角山でホウチャクソウを見ました。沢山の草に埋もれるように咲き始めていました。今頃は花の最盛期が過ぎた頃でしょう。

花粉の運び手は昆虫頼り。昆虫も花を見つけにくいのか、結実の度合いは良好でないと言います。

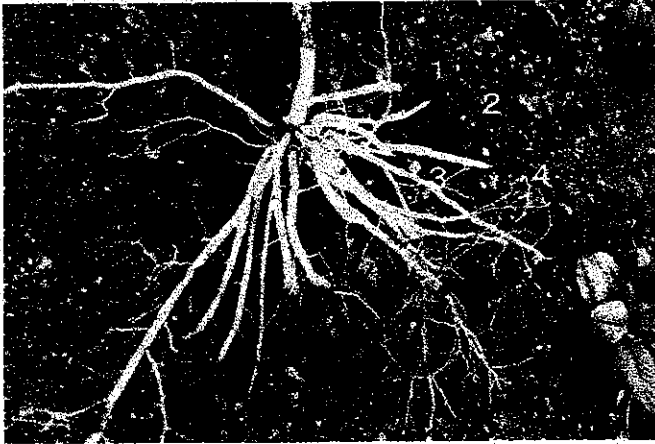
「上層の落葉樹が完全に展葉し、林床に暗い陰を投げかける頃。ホウチャクソウの葉もしっかりと開ききる。」（「植物生活史図鑑」より引用）春植物は林床に降り注ぐ陽光を利用しますが、ホウチャクソウは違うタイプのようなのです。光も多様、利用するタイプも多様。奥の深い話です。

<種子の稔り>

秋には黒い漿果（ベリー・berry）をつけます。種子は意外と少なく、1個体あたりわずか4.7~5.3個。黒ですから、小鳥へのアピール色です。しかし、沢山の植物に埋まっていますから、小鳥による種子散布は、効果的でないようです。

<ラメットによる繁殖が中心>

ホウチャクソウの繁殖はラメットによるものが多い。観察会でも、ホウチャクソウは群落を作って生えています。これは、ラメットによって仲間を増やしたからです。ホウチャクソウのラン



ナーは長いものになると、1メートルを超えるものがあります。

<ラメット (栄養繁殖体) >

花盛り状態の我が家のホウチャクソウを掘り起こしてみました。4本のランナーが見られます。この先にラメットが形成されます。ジャガイモと同じです。親芋が栄養を使い果たし、新ジャガが次への命の担い手として成長します。

天気の話

<低気圧に向かって強い風が吹き込んだ日>

5月15日夜から16日の朝にかけて強い風が吹き荒れました。ゴーゴーと凄まじい風の音で目が覚めました。発達した低気圧が北海道の上空を通過しました。低気圧に向かって風が吹き込んだのです。

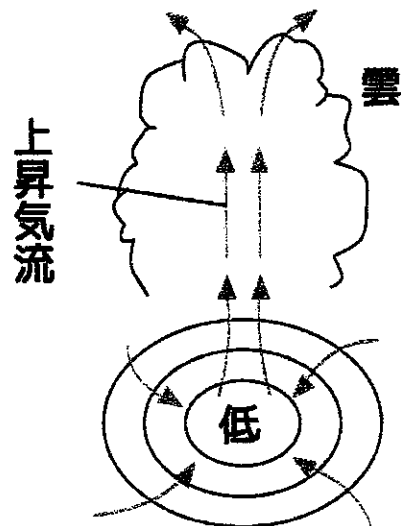
<こんなに風が吹き込んで、低気圧は大丈夫かな。>

<大丈夫です。低気圧では絶えず上昇気流が発生しています>

地球の自転のせいで北半球では、時計の反対回り(左回り)で風が低気圧に吹き込みます。そして、吹き込んだ風(空気)は、上昇気流となって上空に吹き上がっていきます。

<上空にいくと空気はどのようなのかな>

- ◆気圧の低い上空にいきますから、空気は膨らみ(膨張)します。そして、軽くなります。
- ◆膨らむと空気の温度が下がります。それに、上空にいくほど寒いからです、いっそう温度が下がります。
- ◆空気の温度が下がると、その中に含んでいられる水蒸気の量が減ります。水蒸気の量が余ってきます。
- ◆余った空気は、細かな水滴となって現れてきます。雲の発生です。
- ◆ですから、低気圧周辺は雲が発生したり、雨が降ったり、風が強くなったりと、天気が不安定になります。



* 観察会等のご案内

北広島レクの森観察会	6月19日(日) 10:00~12:30	北広島レクの森駐車場集合
オオハンゴンソウ防除	6月30日(木) 10:00~12:30	自然ふれあい交流館集合・解散
藻岩山登山観察会	7月8日(金)	慈啓会病院前登山口

文責：春日 順雄

自然観察 NOW

No 13

野幌森林公園自然情報

発行：2016年8月4日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

涼を求めて

<どうして森の中は涼しいのでしょうか>

1. 木陰を作ってくれるからです

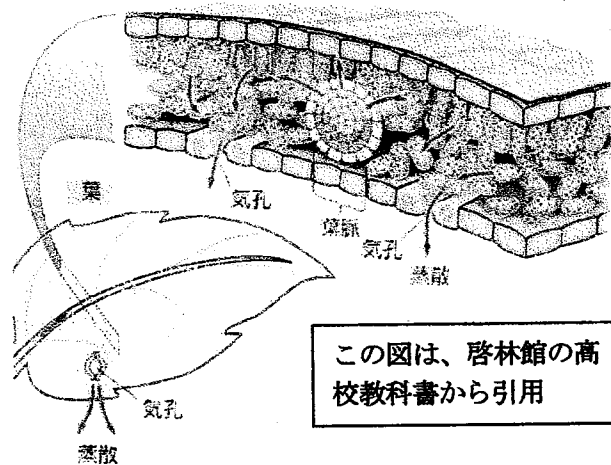
直射日光を避けて木陰で涼んだことがあるでしょう。盛夏の緑陰は、暑さを避けるオアシスです。

2. 葉に蒸散作用があるからです

葉の裏に気孔があります。気孔は、孔辺細胞の膨張収縮で開いたり閉じたりします。植物の呼吸、光合成に必要な二酸化炭素を取り入れる大事なところですよ。

気孔が開くと水が水蒸気となって大気中に出ていきます。これを蒸散作用といいます。

水が水蒸気になるには、水1ccあたり、539.8カロリーの気化熱が必要です。この熱は森の大気から供給されます。沢山の葉が蒸散作用をしますから、森の中の気温が下がります。だから、森の中は涼しいのです。



この図は、啓林館の高校教科書から引用

<夏、葉を落とすナニワズ>

オニシバリ、ナツボウズの異名で知られます



<4月18日撮影>



<8月5日撮影>



<11月6日撮影>

赤く輝く果実の写真は、数年前、本日のコースで撮影しました。よく見て下さい。葉がありません。「ナツボウズ」の名は、ここからきています。雌雄異株です。夏、雌株は赤い果実で見つけられますが、雄株を見つけるのは難しいです。

秋に葉とつぼみが出てきます。春の一番に花を咲かせる準備をするのです。ナニワズは、落葉広葉樹の林床に適した生活をしています。

早春に花を咲かせる植物は、秋に目覚め準備を始めます。フクジュソウ・エゾエンゴサク・カタクリ、アズマイチゲ、キクザキイチゲなど、早春の花は、秋に発根、花芽を作り、冬を越します。

オニシバリの由来は、樹皮が強靱で手ではなかなか折れないため、鬼をも縛ることができるという意

味からです。樹皮繊維は強靱なので和紙の原料となります。陰樹なので庭木の下木として用いたりします。花、樹皮、果実にクマリン系配糖体ダフリンがあり有毒です。アイヌ民族はこの木から絞った液を矢毒に用いたといわれます。

<木肌が対照的なハクウンボクとアサダ>



ハクウンボク

ハクウンボク

葉が大きくハビロの名で親しまれている木。6月上旬、新しい枝の先に白く清楚な花を咲かせます。その様が青空にたなびく白雲のようであることから白雲木の名がつけました。

ハクウンボクの木肌は灰黒色、きめが細くなると優しい感じがします。

花の美しさと白い花の清楚さが好まれ、茶室の花として用いられます。また、アイヌ民族は葉をタバコのように用いたといいます。

材は心材、辺材の区別がなく淡黄白色、ときには淡黄褐色で、肌目は緻密です。東北地方ではコケシや将棋の駒の材として利用されています。



ハクウンボク



アサダ

アサダ

鉄の木と呼ばれるほど強い木

アサダの木肌は荒々しい感じですが、縦に不規則に割れ目があり、下からめくれ上がっているように見えます。アサダには、ミノカブリ、ハネカワという方言がありますが、この形状からきています。

アサダの材質は重硬できわめて緻密です。アメリカではアイアンウッドあるいはストーン

ウッド、中国では鉄木と呼ばれます。いずれも材が強いことからの呼び名です。木材の色は、やや紅色を帯びた淡い褐色で、磨くと美しい光沢が出るので床板、家具器具材、靴の木型などに利用されています。

アサダの果穂は、野生のホップ(カラハナソウ)に似ています。サワシバも同じ形の果穂をつけます。



アサダの果穂

<参考とした本:「おもしろい木の話」北海道林業普及協会刊・高校教科書生物I(啓林館刊)>

<観察会案内>

- ・9月4日(日) 恵庭公園観察会 10:00~12:30 集合:恵庭公園中央駐車場
- ・9月10日(土) 秋の花でにぎわう森を歩こう 10:00~14:30

自然ふれあい交流館集合・解散

文責: 春日 順雄

自然観察NOW

No.14

野幌森林公園自然情報

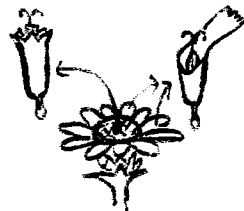
発行：2016年9月10日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

日ごと秋の深まり行くこの季節。花暦の最後を彩る花々、次世代に命を繋ぐ多彩な種子や秋を知らせる虫達を訪ねて、森歩きを楽しみましょう♪

この時期よく目に付く**菊の花**。キク科の花は小さい花が多数集まって一つの花を作っています。小さな花には2種類あります。

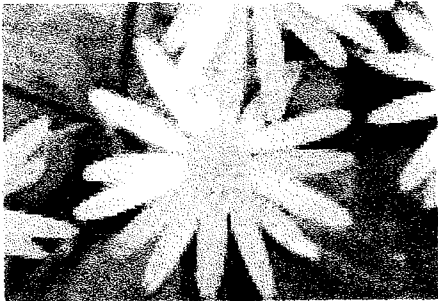
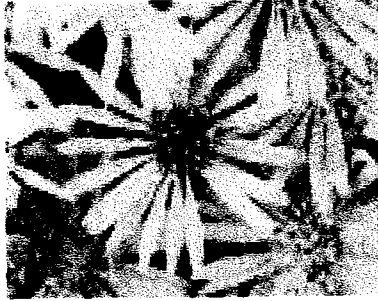
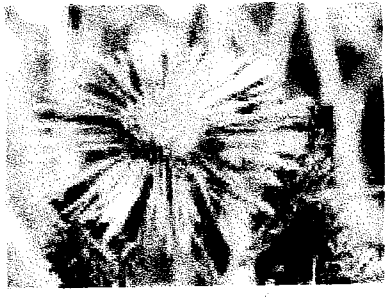
筒状花（とうじょうか）
花冠が筒状になっていて
先端がいくつか分かれる



舌状花（ぜつじょうか）
花冠の一方だけがのびそ
の先がいくつかに分かれる

タンポポやコウゾリナのように、舌状花だけが集まっているもの、アザミやヨモギ、ミミコウモリは筒状花だけが集まっているもの、アキノキリンソウ、オオアワダチソウのように両方の花をもっているものがあります。

野幌森林公園でこの時期よく観察できる、両方の花を持つキク科の花々です。

エソノコンギク	ユウゼンギク	ネバリノギク
		
花びら（舌状花）20枚以下	花びら（舌状花）20枚以上	花びら（舌状花）50枚以上
茎や葉に剛毛があってザラザラしている	茎や葉に毛がなくツルツルしている	茎や葉、花の柄に触るとねばねばする
葉の基部は茎を抱かない	葉の基部は茎を半ば抱く	葉の基部は耳状に抱く
葉は幅のある楕円形でふちに荒いギザギザがある	葉は細い楕円形でふちはなめらか	葉は細い楕円形でふちはなめらか

北海道ボランティア・レンジャー協議会発行「自然観察ハンドブックⅡ」より

秋になるとみかける **あかとんぼ**

「アカトンボ」という名前のトンボはいなくて、「アカネ属」の仲間が赤くなります。アカネ属は日本では21種類、北海道では18種類が見つかっていて、代表的なものに、「アキアカネ」「ヒメリスアカネ」「マユタテアカネ」「ノシメトンボ」などがあります。

トンボには卵で越冬するもの、ヤゴ（幼虫）で越冬するもの、「オツネトンボ」のように成虫で越冬する3タイプがありますが、アキアカネは卵で越冬し、一年で一生涯を終えるサイクルで生息しています。

「アキアカネ」の一年

冬 卵で越冬、乾燥にも強く一時的に水が無くても大丈夫。

春 **4月頃**、水の中で孵化。
ヤゴ（幼虫）は水中で約3ヶ月の間に何回もの脱皮をくりかえして成長。

夏 **7月頃**、終齢幼虫は夜に水中から出て草などにつかまって羽化。
羽化したばかりのアキアカネはクリーム色で乾くと橙色にかわる。

8月頃、水辺をはなれて標高の高い山に多くが移動。
（変温動物のトンボは気温の影響を強く受ける）

秋 **9月頃**、高山で成熟したトンボは低地に降りる。

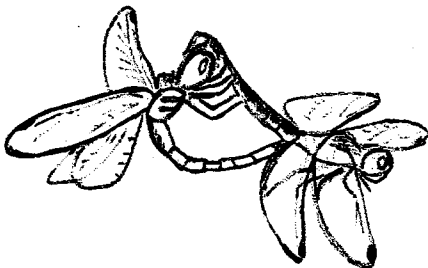
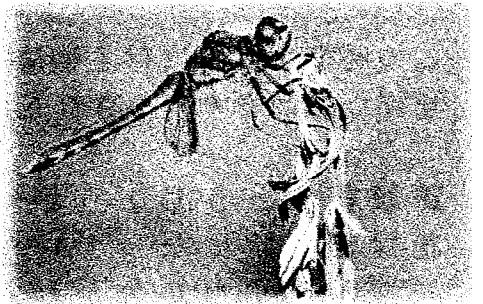
雄がお腹の先の付属器で雌の頭をはさみ
二匹づつつながって飛行。

雌がお腹の先が雄のお腹の付け根の副性器にくっついて交尾し、

その後、二匹は連なったまま水田や沼などの水面上に飛び、雌の腹部先端で繰り返したたきそのたびに数個の卵を産み落とす。

（参考文献「札幌のあかとんぼ」札幌市博物館活動センター）

文責：宮津京子



10月の観察会

10月13日（木）：秋の森の匂いをかごう（10：00～14：30）

集合場所：開拓の村集合・解散

10月23日（日）：晩秋の森観察会志文別コース（10：00～14：30）

集合場所：自然ふれあい交流館集合・解散

ゲンノショウコって、漢方薬？

江別市 藤田 潔

ゲンノショウコは北海道では野原、空き地、林辺などごく普通に見られる植物です。お茶や薬として古くから親しまれ、その胃薬としての効用から“現の証拠”が語源と言われる程でイシャイラズ（医者いらす）、タチマチグサ（たちまち草）の異名があります。また、その果実形状からはミコシグサ（神興草）とも呼ばれています。

今回は薬としての位置づけを探っていききたいと思います。

植物としてのゲンノショウコ

フクロソウ科フクロソウ属の多年草

学名：*Geranium thunbergii*

和名：ゲンノショウコ

形態：茎は 30~40cm、葉は掌状に分かれる。

紅紫色または白紫の花、夏に開花、

花弁 5 枚。

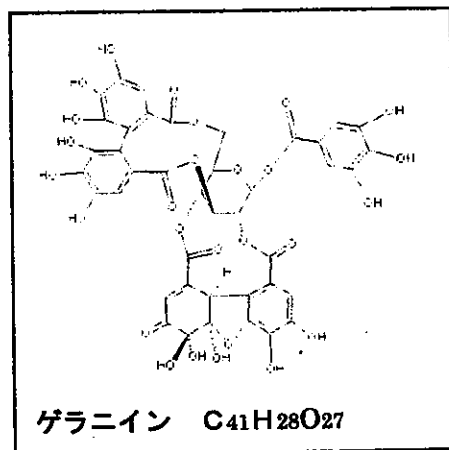
分布：北海道、本州~九州。朝鮮半島、中国大陸。



薬としてのゲンノショウコ

ドクダミ、センブリと並び日本の“民間薬”の代表と言えます。有効成分はタンニンの一種のゲラニンで全草を煎じて下痢止めや胃薬とし、また“(健康)茶”として飲まれています。飲みすぎても便秘を引き起こさない優秀な整腸“生薬”といえましょう。

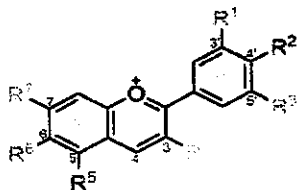
江戸時代より「本草綱目啓蒙」（1803年）の中で取り上げられ、現在も「第十七改正日本薬局方」に収載されており（→資料①）保険適用薬（医薬品第3類）です。



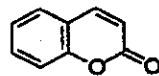
※ タンニンとは植物に由来し、タンパク質・アルカロイド・金属イオンと反応し強く結合して難溶性の塩を形成する水溶性化合物の総称。タンニンは皮をなめす“tan”に由来している。

タンニンは特定の性質により分類するための名称であり、現在は構造による分類が主流なためポリフェノールの一部としての呼称となっている。

※ ポリフェノールとは植物の樹皮や種子などに含まれる天然成分で苦味渋味が特徴。ベンゼン環にヒドロキシル基がついたもの(フェノール)が複数集まって化合物を作るとポリフェノールとなる。フラボノイド(タンニン、アントシアニンなど)、リグナン(ゴマ由来)、クルクミン(ウコン由来)、クマリン(サクラ葉由来)などがある。



アントシアニン



クマリン

生薬とは

生薬とは天然に存在する薬効を持つ植物や動物・鉱物の有効成分を生成することなく一部または全部が利用される薬物の総称。世界各地の伝統医学では多くの生薬が知られています。

それに対して現代欧米でいうところの医薬品は、有効成分を抽出した物もしくは科学的に合成されたものが対象となります。つまり欧米では生薬にあたるものは一般にハーブ類と呼ばれることが多いようで、芳香剤・防虫剤からメディカルハーブ(ミント、ラベンダー、セントジョーンズワートなど)に至るまで広範囲の概念となります。

生薬を分類すると……

動物由来：蟬退(センタイ) 牡蠣(ボレイ) 麝香(ジャコウ) 牛黄(ゴオウ)
 熊胆(ユウタン) 阿膠(アキョウ) 鹿茸(ロクジョウ)
 地龍(ジリュウ) 反鼻(ハンピ) 夜明砂(ヤミョウシヨウ)
 蟾酥(センソ) 他

鉱物由来：石膏(セッコウ) 龍骨(リュウコツ) 他

植物由来：当帰(トウキ) 芍薬(シャクヤク) 桂皮(ケイヒ) 陳皮(チンピ)
 附子(ブシ) 車前子(シャゼンシ) 喘息薬種(ズダヤクシュ) 他多数

漢方薬とは

漢方薬は、伝統中国医学に端を発し漢方医学の理論に基づいて日本で独自に発展した処方される医薬品のこと。蘭方に対する言葉で江戸時代後期から使われ出しました。

① 中国医学の古典

「皇帝内経」「神農本草経」「傷寒論」「金匱要略」など

② 漢方の理論

陰陽五行の説 気血水 経絡 などの理論に基づき“証”(いわゆる体質という概念に近い)を診る。これに対し西洋医学では臓器、組織に原因を求める。

③ 日本での漢方の流派

後世派： 曲瀬 道三

古方派： 山脇 東洋 吉益 東洞

折衷派： 多紀 元簡

漢蘭折衷派： 花岡 青洲

④ 民間薬との違い

民間薬： 経験則によるもので1種か2種の組み合わせによるものが多い。

ex) センブリ、ドクダミ…

漢方薬： 複数の生薬を組み合わせた方剤。例外として独参湯、甘草湯。

ex) 葛根湯、八味地黄丸、当帰芍薬散、芍薬甘草湯…

・葛根湯を構成する生薬

カクコン タイソウ マオウ カンゾウ

ケイヒ シャクヤク ショウキョウ

・八味地黄丸を構成する生薬

ジオウ サンシュユ サンヤク タクシャ

ブクリョウ ボタンピ ケイヒ 修治ブシ末

1日量全量服用するとグリチルリチンの許容量をoverするので連用不可
短期間・頓用のみ可
ステロイド併用注意

⑤ 修治

漢方では生薬そのままでは毒性が強いなどの理由で、生薬に対する加工を行い修治(シュウジ)という。

ex) 附子 (→資料②)

濡らした紙に包み灰の中に入れる。

オートクレーブ加熱など。

※ 専門的な薬学的知識が必要であり、非常に毒性が強いため素人は処方すべきでない。

⑥ 民間薬と漢方薬との関係

・民間薬と同じ生薬のみの漢方薬

オタネニンジン(朝鮮人参) ⇔ 独参湯(人参のみ。使用法は決められている。)

・民間薬と同じ生薬を配合した漢方薬

シテイ(柿蒂)民間薬 → 柿蒂湯 漢方薬(シテイ チョウジ ショウキョウ)

結論

以上より ゲンノショウコは **生薬(民間薬)** であって **漢方薬** とは言えない。

参考文献・ヴィジュアル版 植物ラテン語事典 ロレイン ハリソン著 上原ゆうこ訳

・第十七改正日本薬局方(平成28年3月7日 厚生労働省告示 第64号)

資料①〈ゲンノショウコ〉②〈加工ブシ〉は第十七改正日本薬局方より <略>

「野鳥をガイドする ～私のガイドの試み～」

I はじめに

この話題提供は、私が自然観察会や探鳥会で野鳥のガイドを長年試みて、日々感じる反省点から、試みている“野鳥のガイドの試み”を紹介するものがある。

今後、自然観察会で野鳥を紹介する際に、野鳥のガイドで参考になれば幸いと思い発表する。

1. 観察会での問題：私が探鳥会や野鳥のガイドで参加者を観察すると、まず参加者は鳥を見つけると、すぐさまその鳥の名前を聞きかたがる。そこで、“その鳥の名前”を教える。すると、参加者はそれで満足して、鳥の観察は終わった！ような気になってはいないだろうか？

これは初心者に限らず、観察会や探鳥会などでも、探鳥の経験の多い方も同じように思う。

つまり、参加者は鳥の名前を知るだけで満足し、他に何も興味を示さない実態。本当の野鳥の観察の目的は、鳥の生態を知り（“鳥のふしぎ”を知る）、更には「生物の多様な関係」にまで興味・関心を持ってもらうことだと思うのだが。しかし、参加者を問題にする前に、これは観察会で案内するガイドの問題と思う。ガイド自らが野鳥の生態について学び、それを紹介し、参加者に関心・興味を持つガイドをしているだろうか？と、私自身は反省している。

そこで、今回の話題提供は、以下に従って野鳥のガイドを試みしてみる。

2. 対象者は、主に初めて野鳥を見る初心者。 3. 場所は、野幌森林公園。 4. 観察の野鳥は、主に森林の野鳥。 5. このガイドのねらいは、参加者に野鳥に親しみを感ずてもらい、更に鳥の生態に興味や関心を深めてもらうためのガイドの試みである。

II 野鳥の観察会の試み

1. 野鳥の見つけ方

- ① 目で姿を見て見つける。 ② 耳で鳴き声を聴いて見つける。
- ③ その鳥の行動・特性・生態から見つける。

1-① 目で姿を見て見つける。(よく観る)

☆ねらい☆：ここでは、特に初心者が“その鳥を初めて見て、その鳥が何かを知る方法”として、ア～クの項目で探って鳥を絞り込む試みを紹介する。

(★ガイドの試み① A「クイズ」を利用する)

☆ねらい☆：「クイズ」を利用することで、ガイドの説明だけに終わらず、参加者を「クイズ」で参加させることで、受け身でなく自らが自分で考えさせる観察会にする。

⇒ (注意) 限られた時間の中でのガイドでは、全てを利用できない時にはこの中の項目を選んで使用する。

ア 野鳥のいる場所から探す (消去法などを使う)

- Q① 森林にいる鳥は、どんな鳥？ (例) Q アカゲラは、どこにいる鳥？
- Q② 草原にいる鳥は、どんな鳥？ (例) Q オオヨシキリは、どこにいる鳥？

1-① 目で姿を見て見つける (2)

イ 大きさから探す (“ものさし鳥”の大きさと比較)

(例) Q ムクドリとキジバトの大きさは?

”ものさし鳥“: スズメ(14 cm)・ムクドリ(24 cm)・ハト(33 cm)・ハシブトガラス(50 cm)

ウ 目立つ特徴から探す (姿・形・色・尾の長さ・嘴・胸など):

(例) (嘴に注目!) Q シメとヒヨドリの嘴は?

エ しぐさから探す:

(例) Q ハクセキレイとモズのしぐさは?

オ 歩き方から探す:(歩き方の比較) ・ホッピング・ウォーキング

(例) Q スズメとヒバリの歩き方の違いは?

カ 脚の数から探す:

Q① 野鳥の脚は、何本?

Q② では、キツツキの脚は、何本?

(ガイドの答え) 4本(木に止まる時は、前脚2本と後脚2本と尾羽で静止する)

キ 飛び方から探す:(飛び方の比較) ・直飛・波状飛

(例) Q キツツキとムクドリの飛び方の違いは?

ク 重さから探す:自分の身近にあるものの重さをはかっておき、それを鳥の重さに当てはめて

紹介する。(例) 1円玉の重さは1g

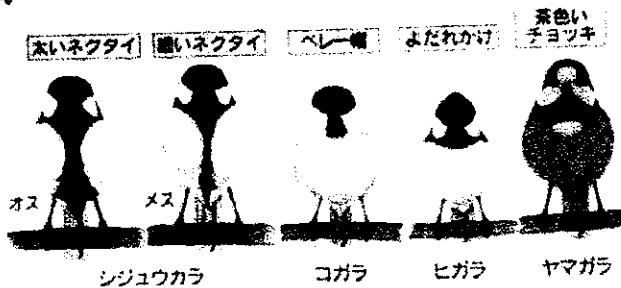
Q キクイタダキの重さは、1円玉何枚?

(実践編1) ☆野鳥の姿の違いを探す

☆ねらい☆ 野鳥の違いに気付いてもらう。

(★ガイドの試み② B「絵」と「クイズ」を利用する)

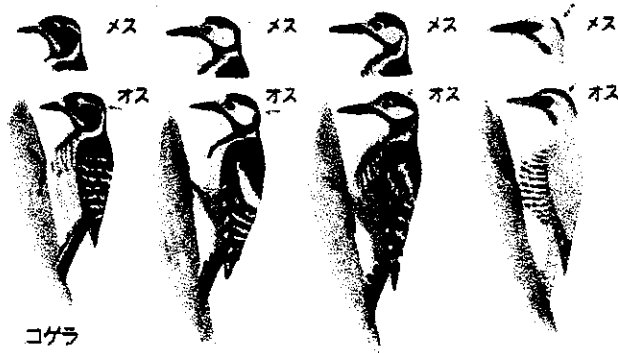
Q シジュウカラの仲間を見分け方は? (ガイドのヒント) 頭と胸に注目!



(実践編2)

Q① キツツキの仲間の見分け方は？ (ガイドのヒント) 頭と胸と背中に注目！

Q② オスとメスの見分け方は？ (ガイドのヒント) 頭に注目！



コゲラ

アカゲラ

オオアカゲラ

アオゲラ (オホキツツキ) ※(この鳥は北海道には生息しない)

1-② 耳で鳴き声を聴いて見つける。(よく耳を傾けて聴く)

・鳥の姿は見えなくても、その鳥が何かを知ることができる！

☆ねらい☆ 野鳥の“鳴き声”で覚えるのは難しい。それでは自分で覚えやすい”鳴き声”を作る。

自分だけの「聞きなし」を作るには、よく野鳥を観察することになる。そうすれば野鳥への親しみもわくし、観察が楽しくなる。

ア 「さえざり」と「地鳴き」の違いについての説明

(★ガイドの試み③ C器具を使用)

Q① ところで、「ドラミング」は誰がしてるの？ 何のために？

Q② その鳥は、どの季節に鳴いているか？ (春？夏？冬？)

イ 野鳥を“鳴き声”で覚える → ”聞きなし”で覚える

(★ガイドの試み④ C自分で「聞きなし」を作る)

(例) センダイムシクイ (焼酎一杯グイー) ・ヒガラ (貯金、貯金)

エゾセンニューウ (じよっぴん、かけたか?) ・トラツグミ (さびしい、さびしい)

Q では、マヒワは？

(応用編) ☆野鳥に名前を付ける。

・鳥の姿をよく見て・鳴き声をよく聴いて、その特徴から自分で鳥の名前を付ける。

☆ねらい☆ 野鳥に自分だけの名前を付けるには、よく野鳥を観察しなければならない。そ

うすれば野鳥への愛着も生まれ、野鳥への観察が楽しくなる。

(★ガイドの試み⑤ D自分で名前を付ける)

(例) アカゲラ (赤ふんどし) ・ノゴマ (日の丸) ・ヒガラ (よだれかけ) ・

ハシブトガラ (ちょび髭) ・シジュウカラ (蝶ネクタイ) ・

Q では、亜種シマエナガは？

1-③ その鳥の行動・特性・生態から野鳥を見つける。(自分が知識として知っておくこと)

☆ねらい☆：観察する場所に生息する鳥は何か、渡って来る鳥は何かなどの特徴を知っておくと、①そこにいついる鳥か(1年中か・ある時期だけ)、②そこにいつ来る鳥か、③そこをいつ去る鳥かなどが解る。それには、まずその場所の「留鳥」を覚える。「留鳥」は季節を問わずいつでも見られるし、よく観察ができる。

⇒ (注意) ガイドの時間の関係もあり、全ての項目は利用できないので、この中の項目を選んでガイドでは使用する。

ア その地域の「留鳥」中心に、それ以外の「夏鳥」「冬鳥」「旅鳥」の鳥を知る。

イ 北海道の鳥について知る

☆ねらい☆：“北海道の鳥”の特性を知ることは、“本州にもいる鳥”か、“北海道にしかいない鳥”か、また“本州にしかいない鳥”がわかる。それは“本州の鳥”と“北海道の鳥”についての違いを知ることになり、更には“世界の鳥”について知ることにつながる。

① 日本で北海道にしかいない鳥 (消去法などを使う)

- ・北海道だけに棲む鳥：ハシブトガラ・ヤマゲラ・エゾライチョウ・コアカゲラ・ミユビゲラ・シマフクロウ・タンチョウ・ギンザンマシコなど
- ・北海道だけに来る鳥：シマアオジ・オオワシ・オジロワシ・ウミガラス
エトピリカ・ウトウなど

※ブラキストン線で隔てられた鳥たち (ガイドの説明)

(津軽海峡より北の鳥:留鳥)

② “本州の鳥”と“北海道の鳥”の違いを知る： 亜種名と特徴

(★ガイドの試み⑥ E「絵」(写真)と「クイズ」を利用する)

- ゴジュウカラ と シロハラゴジュウカラ (亜種)、エナガ と シマエナガ (亜種)、カケス と ミヤマカケス (亜種)、フクロウ と エゾフクロウ (亜種)、コゲラ と エゾコゲラ (亜種)、アカゲラ と エゾアカゲラ (亜種)、オオアカゲラ と エゾオオアカゲラ (亜種)、キバシリ と キタキバシリ (亜種)、ヤマセミ と エゾヤマセミ (亜種)、ヒヨドリ と エゾヒヨドリ (旧亜種) など。

ウ 「鳥」の“なぜ”をさぐる！ (参考：2012年4月の下見の際の話題提供で発表)

☆ねらい☆：“鳥”の“なぜ”をさぐることは、「鳥」の“ふしぎ”を知ることになる。それは、「鳥」の“ふしぎ”を知って、「鳥」の“すばらしさ”を知ることとなり、その感動はもっと“鳥”の“こと”を知りたくなるはずである。

ウ 「鳥」の“なぞ”をさぐる！(2)

(★ガイドの試み⑦ A「クイズ」を利用する) ⇒ 鳥への興味を喚起することのねらい。

Q 鳥にあって他の動物にない大きな特徴はなに？

Q 鳥と他の動物の違いはなに？

体は？ 眼は？ 口は？ 耳は？ 歯は？ 骨は？ 糞(ふん)と尿は？ 卵は？

体温は？ などの違い。

Q 鳥の耳はどこにあるの？ 鳥には口はあるの？ なぜ歯がないの？ 骨はなぜ空洞なの？

鳥の糞はなぜ白い？ 羽毛の“ひみつ”は？ 羽毛はどんな役割をするの？

鳥はなぜ“さえずる”の？ 鳥はなぜ雄の方が雌よりきれいなものが多いの？

鳥はなぜ卵を産むの？ 鳥の卵は、なぜまん丸じゃないの？ 鳥はどれほど貞淑なの？

エ 命名の語源を知る 和名・学名・英名

☆ねらい☆：その鳥に名前が付けられた理由を知ること、鳥の特徴や生態などを知ることになる。特に和名の漢字名表記から語源を探ると、理由がよくわかり由来が面白い。

(★ガイドの試み⑧ B「絵」(写真)と「鳴声」で「クイズ」を利用する)

・和名(命名から・語源からなど)

命名から：Q(例) ハシブトガラス(くちばしが太いカラス)

カッコウ(カッコウと鳴くから) ※(英名)(仏名)も同じ。

語源から：Q((例) トビ(飛ぶ能力が優れているから「飛び」→トビ)

スズメ(「スス」は小さい。「メ」は鳥・群れの意)

・和名の漢字名から：ハシブトガラ(嘴太雀)

エナガ(柄長)

・英名： Q(例) コゲラ(Japanese Pygmy Woodpecker)「日本の小さい啄木鳥」

ヒレンジャク(Japanese Waxwing)「日本のろうの翼」

・学名： Q(例) カケス(「ドングリの好きなおしゃべりな鳥」)

ハクセキレイ(「白く絶えず(尾が)動く小さい者」)

☆ねらい☆：オ～クの項目は、“生物の多様性の関係”を知ること。

オ、それぞれの鳥が持つ特殊な生態を知る

①ヘルパー行動 (例) エナガ

②繁殖行動 (例) カワラヒワ

③求愛行動 (例) スズメ

カ 鳥と虫の関係(共存の関係)を知る

①春に子育てをする鳥の理由と虫の繁殖の制限

キ 鳥と植物の関係 (鳥と植物の共存の関係を)を知る

- ①花の蜜を吸う鳥 (例)メジロと桜の花
- ②木の種子を運ぶ鳥 (例)カケスとドングリ、ヒヨドリとナナカマド
- ③木の実を貯める鳥 (例)ヤマガラ

ク 餌は何を食べているのかを知る

(体の形や体の大きさ、嘴の形や大きさや長さなど)

III まとめ

今回、長々と私が野鳥をガイドの際の試みとしての“話題”を提供した。これらは(注意)でも記したが、限られた時間の中でのガイドでは、全てを利用はできない。その時にはこの中の項目をガイドが選んで効率よく使用するしかない。

それには、ガイド自らが“話題”に対する野鳥の生態についての知識を吸収し、それを参加者にどうガイドするかの技術が日々の勉強として必要かと思う。

最後に、私の野鳥のガイドへの思いを語り“まとめ”としたい。野鳥の探鳥会や観察会では先輩のベテランガイドから、次のように忠告をいただくことがある。「観察会では、参加者には実物を見せることを優先すべきであり、ガイドの解説や説明は極力すべきではない」と。しかし、私はその考えには反論がある。ガイドが一方向的に“おしゃべり”をしすぎるのは、その通りだとは思いますが、知識の乏しい参加者には興味を持たせ、そのものを積極的に“知る”ためには、ガイドが意識して野鳥の生態についての“話題”を提供し、野鳥の知識を知らせるべきと考え、私は紹介している。特に野鳥の観察は、植物などとは違いそこにじっとしてはくれないから、ことさら更見るだけでは興味や感動は生まれない。

“はじめに“にも記したように、参加者が”ただ鳥の姿を見、その鳥の名前を知って満足する“だけで終わる探鳥会・観察会にはしたくない！と私はいつも思うからである。

今回提案した“私のガイドの試み”を批評していただき、観察会でガイドする皆さんが、参加者に“鳥のふしぎ”に興味を持ってもらい、その後も野鳥の観察会に参加していただけるようにしていただきたいと、私は願うばかりである。

(参考資料) 日本野鳥の会「野外ハンドブック①山野の鳥」

日本野鳥の会「野外ハンドブック②水辺の鳥」

亜璃西社「新訂 北海道野鳥図鑑」(河井大輔・川崎康弘・島田明英著)

北海道新聞社「新版増補 北海道野鳥ハンディガイド」(大橋弘一著)

日本実業出版社「おもしろくてためになる 鳥の雑学事典」(山階鳥類研究所著)

主婦と生活社「森の野鳥観察図鑑 鳥のおもしろ私生活」(ピッキオ編著)

北海道ボランティア・レンジャー協議会「自然観察ハンドブックⅡ」

事務局だより

1. 新入会員紹介

平成28年度ボランティア・レンジャー育成研修会が8月26日(金)～28日(日)の3日間にわたって開催されました。今年度の受講者は7名で、そのうち5名の方々が北海道ボランティア・レンジャー協議会に入会(会員数133名)されました。これから一緒に活動できることを喜びとし、ご紹介いたします。尚、敬称は略させていただきます。

林 雄一郎(札幌市)、佐藤 武敏(札幌市)、岡 真由美(江別市)
阿部 禎之(札幌市)、寺下 義昭(小樽市)

2. 話題提供者

会員相互の研鑽のために、共催観察会の下見会を利用して、話題提供という形でミニ研修会(9:45～10:15)を行っています。今年度の10月以降の担当者と内容をお知らせいたします。

月 日	テ ー マ	提 供 者
10月12日(水)	サケの一生	宮本 健市
11月 5日(土)	森の公益的機能について	三井 茂
2月 8日(水)	西岡水源地	宮津 京子
3月25日(土)	植物たちの受粉にふれて	佐藤 清一

3. 「自然観察NOW」の執筆者

共催観察会参加者に対して、その時期の野幌森林公園の見どころなどを紹介する「自然観察NOW」を配布しています。今年度の10月以降の執筆者をお知らせいたします

	観 察 会	執 筆 者
10月13日(木)	秋の森の匂いをかごう	早坂 慶子
11月 6日(日)	秋のありがとう観察会	小林 英世
2月 9日(木)	冬の森の観察会	春日 順雄
3月26日(日)	森の中で春をさがそう	小林 英世

4. 会費納入のお願い

ボランティア・レンジャー協議会の活動はすべて、会員の会費によって成り立っています。会員数の減少により、予算規模の縮小に迫れています。役員の高齢化とともに、会の活動に影響を与えかねない状況になっています。未納の会員がおられましたら、趣旨をご理解の上、ご協力をお願いします。

編集後記

- ※ 次々と台風が上陸して被害が大きくなっています。会員の皆様の地区はいかがでしょう
か？お見舞い申し上げます。
- ※ 今年の夏は蒸し暑く、その上気温も高い日が続きましたが、それにもめげず原稿を頂き
まして感謝いたします。お陰様で118号も予定通り発行できました。
- ※ 今年度から会報「エゾマツ」は6月、9月、12月、3月と3か月ごとの発行です。
- ※ いつもこの時期に忘年会のご案内を載せていましたが、今年度から忙しい時期の忘年会
でなく新年会で交流を深めようということになりました。お知らせは119号にて。
- ※ 今月号に千歳市・西川惟和さんが「ノスタルジー」ということで故郷の自然を書いて下さ
いました。ぜひ会員の皆様に「故郷の自然に関して」の原稿をお願いしたいです。A4サイ
ズ、読み切りで。メールの添付ファイルまたは郵便で下記までお願いいたします。

Eメール ukhisui@kke.biglobe.ne.jp

〒 069-0841

江別市大麻元町164-39

内山恭子

「エゾマツ」 秋季号 118
2016年9月16日発行
会長 春日 順 雄